
インフィニット・ストラトス 黒炎の騎士

タラさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 黒炎の騎士

【Nコード】

N2927U

【作者名】

タラさん

【あらすじ】

主人公一夏のセカンド幼馴染が転入してくるのと一緒に、彼女もまたやってきた。

彼女は凶暴で馬鹿で浮き沈みが激しいが間違いなく強く、他人をあまり信用しなかった。

コレはそんな彼女と一夏達の物語

プロローグ（前書き）

クウガが煮詰まってるので息抜きが寺に書きました

女は叫びながら持っている剣で切りかかる。

全身全霊 ありつたけの殺意と意志を込めた剣は――

「ああああっ」

「！！！？」

鎧の右手に力ずくで止められていた。確かに鎧は割れ、骨にまで届いている。が、それでも動かないほど深くはない。

「こうでないとな……」

鎧は喜ぶようにつぶやく。

「こうじゃないとなあ！！」

叫んだ瞬間黒炎が紅蓮の炎に変わり、二人を飲み込む。

大地が溶解するほどの超火力が一瞬で翼のある鎧を覆った見えない何かを完全に消し去り、女性を消滅させる。

後には溶けた鉄と光る石のような物と黒い鎧しか残っていない。

鎧は意志のような物を拾い、ふわりと浮かんで解けていない場所に着地する。

黒い鎧から黄色い炎がちろちろと放出され、それを目印にしたかのように闇の中からマントをつけた群青色の上に赤い液体をぶちまけたような色の鎧が出現する。

マーブルの鎧は全身鎧の物とも溶けた物とも違い、串刺し死体のペイントが施された翼、周囲に従える十数匹の蝙蝠、両手に持った赤い液体が滴る巨大な杭スパイクを持った不気味な物だ。

「ピスキス……俺の仕事のはずだが？」

全身鎧の口の部分だけが左右にスライドする。

「終わるたびに放浪するお前を見つけるのは骨です。
探すのはただじゃないんですから最低限教えてくださいです」

杭を持った少女も鎧を解く。

バイザーの中に隠された顔の右半分が焼け爛れていたが、逆に左半分の美しさを引き立てる不思議な光景を作っていた。

「俺は自分以外に縛られるつもりはない。
そもそもお前達の所にいるのも俺の得の為だ」

「さすがは代表候補生様。
言うことが違ってます」

ピスキスと呼ばれたドレスの少女は鎧の少女を皮肉る。

「皮肉をだけなら空気に帰してもいいが」

右手から炎を出す。

もう半分も焼けばバランスもいいだろうといわんばかりに。

「違います。」

殺りあってもいいですが相討ちは必死ですよ？」

確かに、残存エネルギーでは一分戦えるかどうかわからないし、向こうの武器なら炎を抜くこともできる。悪ければ相打ち。

よくても重傷を負う。

まだ生き残りがいるかもしれない現状では得策ではない。

「ちっ……口には気をつけろ」

「はいです」

そういつて笑うがどちらかというと晒っているように見える。

「貴方にはIS学園に行ってもらうです」

（IS学園？

名前からして学校だが、何でまた）

「理由を言え」

「貴方に教育の機会を与えるた——」

鎧は頭蓋骨程度の大きさの黒炎塊を胸部から発射する。だがそれは不自然に掻き消える。

「性質の悪い冗談は嫌いだって言ってるんだろ？」

「本題はこれです」

そう言ってデータを鎧に転送する。

鎧の視界に映るのは三人の男女と一機の翼の生えた機械の鎧。

男は自分の感性から見ても整った顔で、男と同一年くらいの女は凜としている。

どの程度やれるか楽しみに感じる。

だが最後の一人——ウサミミの女に対して何故か感じた物は——嫌悪感だった。

「こいつらは何だ？」

女性以外からは共通点が見れない。

そして鎧と男からはなおさら見つけれない。

「相変わらず無知ですね。」

少しは勉強したらどうですか？」

「あそこで生きるなら腕っ節と抜け物なさがあれば生きるのには十分だった。

追加するなら読み書き計算だ」

「それはおいておいてこ、の二人は世界的にも有名人です。」

ウサミミ女はタバネ・シノノ、インフィニット・ストラトスISの生みの親にしてこの世界の女神です。

もう片方の女は女神の妹のホウキ・シノノです。

そして最後の男、イチカ・オリムラは——唯一男でISを使えるのです」

「……どういうことだ？」

無知な自分でも知っているが、ISはどういうわけか女しか使えな

い。

正直作った奴がとてつもなく捻くれてるか男嫌いだと思っていた。
だが例外はあったようだ。

「プロがわからないのに私たちが分かるわけないです。
貴方のお仕事は3つです。

1：イチカ・オリムラの監視若しくは捕獲

2：イチカ・オリムラのIS白式のデータ若しくは本体の確保

3：タバネ・シノノの身柄——最悪首から上の確保。

敵地のど真ん中かつ場合によっては反則技を持っていそうな女神様
を相手にするから、どれか一つでも十分と隊長は言っていました」

「……豚どもはしってるのか？」

一番殺したい人種を得させたくはない。

正直焼き払いたいのが得のためにも我慢しないといけないのが腹立た
しい。

『ゴミタメ』ならある程度は認可されてたのと思う。

「いいえ、この仕事は隊長の独断です。

貴方が選ばれた理由はIS有り無し問わずにうちで最高クラスの戦
闘力がある事と外見年齢が一番それっぽいのもありますが、一番の
理由は」

最大の理由くらいこの流れならわかる。

「戸籍以外で学校に行っていない俺に勉強させようってか？」

「はい。

こっちは表の癖に裏仕事ばかりで利益しか脳にない豚どもも気づか

ないだろうし、京が一ぱれても言い訳がつきます」

「こういう時は我が身の学のなさが便利だと思うな」

鎧はやれやれといった風に両手を広げる。

「イレギュラーかつ場所が場所のための為現地に協力員は一切いませんです。

そして任務が最悪の形で失敗した場合は、私が処刑に来るのであしからずです」

ドレスの少女は笑顔で言う。

「ああ。

けど忘れるなよ……」

開いた口元が凶悪な笑みを浮かべる

「もしお前達が俺の損になるなら——全力で叩き潰す事を」

「了解です」

プロローグ（後書き）

恋愛描写ってのがわからないから教えてほしい

着火1 転校生は不良少女？

「ここがIS学院」

異様にでかい鞆を担いだ男物の制服を着た少女は巨大な学校を見上げる。

「暢気な所だ。

俺には合いそうにないな」

育った場所と生きてきた場所を思い浮かべてもここは真逆の位置にある。

（まあ、休暇にはちょうどいいか）

強引に結論付けて歩いていく。

「しつつかし——眠い」

人生初の興奮で二日は眠っていない。

「俺にもこういうところがあったか」

ONになれば飛ぶだろうが、そんな機会もないだろうから早く寝たい。

「とはいえ……授業つてのは起きてないとまずいらしいからな……」

面倒毎は悪知恵と力技で解決してきたが、今回はそうもいかないだ

ろう。

「そついう所も勉強して来い…か」

飛行機に乗る前に隊長に言われた事を思い出す。

『君は確かに強いし頭も切れる。けど、熱くなった瞬間そついうのは欠片も残らない。』

だから、君に宿題を出すのも今回の仕事の目的の一つなんだ』

『けど君が宿題を終わらせた時、ボク達のケン力は四分から七分になる』

「……………まあやるしかないか」

そう言つて彼女は鞆から本を取り出し、読みながら歩く。

本のタイトルは 『魔法少女 まやか まぎか』

「なるほど…戦闘中に相手がもう大丈夫って言つたら頭は潰せばいいのか」

……………素手でやるのは難しいからハンマーでも用意するか」

物騒なことを考えながら

注：ここから視点が変わります。

「皆さんにお知らせがあります」

とろそうなかんじのする副担任の山田真耶が皆に告げる。

（珍しいな、こんなタイミングで転校生なんて）

クラスどころか学園唯一の男子、一夏が思ったように入学式からそれなりに経ってからの状況での転校生。
結構気になる。

扉が開き、少女が入ってくる

入ってきた少女はかなり目立つ風貌だった。

痛みに痛んだ赤髪　濁った赤銅色の瞳　最低限程度しか手入れが
されていない褐色の肌。

曲がりなりにも年頃の女性ばかりがいるこの学園でお洒落とかファ
ッションとかに真っ向から喧嘩を売るような風体少女の風体は注目
を集めた。

「はじめましてだ。

俺はシド。

ミドルネームもファミリーネームもねえ。

変だと思っても突っ込むなよ？

気に入ってるからな。

以上」

簡潔に言いたい事を伝える。

「えと…シドさんはインドの代表候補生です。

色々と教えて「人に教える事ができるほど俺は頭はよくない。できても実戦で体に叩き込むのが精一杯だ」…席は篠ノ之さんの後ろでお願いします」

他人を拒絶するわけではないがどうにも壁を感じる。

一瞬硬直するが真耶は気を取り直して席を指定する。

「わかった」

一言言つて箒の前に立つ。

「ホウキ・シノノ」。

俺は色々和不慣れなもんでな。

ちつとばかり力を貸してくれねえか？」

「ああ…かわわない。

それと、私のことは箒と呼んでくれ」

箒は鋭い目で見ながら言う。

（この女…嫌な感じがする）

濁った瞳から発せられる不気味な眼光。

なんとなく自分に近い物を持った眼。

自分達とはかけ離れた場所を生きてきた人間の眼。
それに嫌な感覚を箒は覚える。

（だが感覚だけで避けるのもな……）

とりあえず保留にした。

相手がぼろを出すまでこつちが警戒すればいい。

（私がするぐらいだから千冬さんとセシリアはもとより、一夏もしているだろう……）

第の予想は

（なんと云う眼ですの！！？あんな眼は―）

金髪の女性、セシリアに対しては当たって

（なんていうか……目つき悪い奴だったな）

一夏に対しては外れていた。

少し経ってグラウンドでISの授業が行われることになった。

一夏はアリーナの更衣室で全力疾走して即座に着替える。

授業までの間はあまり長くないのに、更衣室までの距離がやけに遠いから必然的に全力疾走しないと間に合わない。

正直やってられないが鈍った体を鍛え直せるとポジティブに考える。

一夏は着替えながらシドのことを考える。

（何ていうか近づき難い奴だったな……離せば案外いい奴かも知れないけど。

もし面倒な奴だったらどうしょ……）

思い出すのは出会って当初のセシリア。

今はともかくあの時の彼女は好きになれなかった。

むしろ偉そうな女って印象しかなくてむかついた。

「まあセシリアも結局いい奴だったから多分大丈夫だろ」

とりあえず結論付けて出ようとする。

扉が開くと

「よお」

目つきが悪い女の子——シドがいた。

シドが着ているＩＳスーツ（特殊なフィットスーツ）は女子はもとより一夏が身に着けている物と異なり首から下を覆うものだ。たぶん特注品だろう。

「テメエがオリムライチカか」

「あ・・・ああ。一夏て呼んでくれ」

「授業つてのもあるから歩きながら話そうや」

「お　おう」

歩いていくけどシドの歩く早さはかなり早い。

小学六年生より大きいくらいなのに恐ろしく早い。

「夕方に訓練用アリーナで一戦やらねえか？」

（一戦って・・・）

「模擬線でもしようって言いたいのか？」

「ああ。

クラス代表をかけて…な」

「俺みたいなのが代表なのが気に食わないと」

「違う違う。そうじゃねえ」

一夏は首をかしげる。

「クラス代表つてのは、なれば注目されるだろ？」

「まあ、そうだな」

「俺は得したいからに生きてる。

代表になれば面倒事は付きまとうだろうが、それ以上の得が手に入る。

つてわけで、奪ってやるよ」

一夏は少し考える。

一日も付き合ったことがない少女。

他人を見下しているわけでもない気がするから、

男はみんな奴隷って思ってるような一部の最近の女よりは好きになれる。

けど――

「気に入らないな」

「あん？」

「欲しい物は全部力ずくで手に入れたるって態度が気に入らないって言ってるんだ」

「気に入らない？そりゃあそうだろうな」

普通に肯定されて一夏は少したじろぐ

「俺は元からそういう性質たちの人間でな。

持っていないモンは手にいれねえと気がすまねえ

それにISを使える男つてのががどれだけできるのか知りてえ。
だから——戦えや」

「俺は——」

「で、やむなく承諾したと言っわけか」

「…ああ」

（あれは正直仕方ないって。

だって授業中にもらんでくるんだぜ？

千冬姉と同じかそれ以上の怖い目つきで延々と）

「正直おやめになったほうがいいと思いますわ」

「何でだ？」

セシリアが心配そうに言うてくるけどわけがわからない。

言い方からしてシドはクラス代表よりも単純に戦いたい感じだった
危険は雰囲気はしたけど、不良的なあれだ

「あの人は、とてもいやな雰囲気を持ってますわ」

「雰囲気って、どんな？」

「例えるなら、とても凶暴な野生の獣」

「大丈夫だって」

「一夏！！」

「一夏さん！」

「「根拠のない自信はやめろ（おやめください）！！」」

根拠のないって失礼だな

「俺だって根拠くらいはあるぞ」

「聞かせてもらおうか」

「もしセシリアが言ったような人間だったとして、そんな人間がウ
チに来るわけがないだろ？」

ある意味正論である。

「そう言われると、なんともいえないですわね」

だろ？

「まあ、気をつけておけばいいだけだ」

（それに、同じ人間なんだから話し合えばたぶん何とかなる。
あの人みたいなタイプならわからないけど……）

「どうしたんですの一夏さん？」

「いや、ちよつとな。」

とりあえずこの話しはなしにして、別の話しにしようぜ」

「別の…ですか…」

「そういえば一夏、ついさっき人づてに聞いたんだが、二組のクラス代表が変わったらしいぞ」

「その話なら私も知っていますわ。」

何でも中国人の転校生だそうですが。

まあ、私の存在を危ぶんでの転校でしょう」

「そいつって強いのかな？」

（ただでさえ色々差があるのにこれ以上広がるのもいやだな…）

「クラス代表だから当然だ。」

まあ専用機持ちは一組と四組しかないから、ある程度は問題はないな」

「その情報は古いわ!!」

「「「え?」」」

勢いよく扉が開くのと一緒に入ってきたのは

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないんだから」

ツインテールの強気な女の子。

そしてその少女に一夏は見覚えがあつた

「鈴!もしかして鈴か!!?」

「そうよ!!中国の代表候補生鳳^{ファン} 鈴音^{リンイン}よ。宣戦布告に来たってわけ」

ガヤガヤと周囲が騒ぐ。

鈴は何か言いたかったが、授業しに来た千冬のためにいえなかった。

昼休みの食堂で、一夏たちは食事をする。

一夏と鈴は一緒に。

箸とセシリアは隣の席でじっと動向を監視しながら。

一夏と鈴が話していると、一夏がISを動かすことになった理由に移った。

ISは男は動かせない。

それは世界中の共通認識だ。

だから見たとしてもやろうとは思えない。

だが一夏によると不思議なことにその時動かせる確信があったらしい。

そして動いた。

ある意味それだけの話で、世界が揺れる話だった。

「なるほど、それでいったん保護するために入れられたってわけか」

鈴と逆方向から声がする。

振り向いてみると、シドが食べていた。

やたらに山盛りの炒飯と野菜炒めを

「お前、いつの間に！！」

「ついさっきだ。」

久しぶりだな、パンダちゃん」

「おいシド！！それは「それで呼ぶな！！」「」

机を利用して跳躍した鈴が放ったとび蹴りをシドは足をつかんで勢いを利用して空中に放り上げて防ぐ。

後頭部が机でこすれたが気にしてはいけない。

「オオオオオオオオオ」

猫みたいに綺麗に着地するが女の子としてはアレな声を上げながら蹲る。

「シド！！鈴の奴その呼び方嫌いだから言つな！！」

「結構かわいいと思うんだがな」

「それでもだ。」

本人が気にしてるんだから言っちゃだめだろ」

「そういうモンなのか？」

「そういうもんだ」

「そうか。わりい」

「あんたが謝るなんて珍しいわね」

「謝らないだけで謝れない訳じゃねえよ」

「ふ〜ん。そう」

鈴は意外と言った顔をする。

「お前らって、知り合いなのか？」

若干親しそうな態度の二人を見て一夏は聞く。

超ド急のドンカン朴念仁だがそれくらいはわかる。

「そうよ。」

私が向こうにいたところに何回か会ったわ」

「料理がわからなくて困ってた所を助けてもらってよ、その上観光案内までしてくれた

借りは返したいんだが、なかなか機会がなくて困ってた所だ」

「別にいいよ。私だってなんとなく助けただけだし。ていうか一年以上前のことよく覚えてるわね」

「それでも借りは借りだ。」

「かりっぱなしってのは趣味じゃねえんだよ」

「そうだよな、借りた恩は返さないとな」

「単に借りっぱなしが嫌いなだけだ。それ以上も以下でもねえよ」

「あつそ。」

「ねえシド……」

「あん？」

「ちょっと席はずしてくれない？」

「わかった……って言いたいところだが、無理っぽいな」

「なんでよ」

「お隣さんが動くぞ」

「え？」

シドが言ったと同時に我慢の限界を迎えたのか知らないが、セシリアと篝がやってくる。

「一夏。そろそろ説明して欲しいのだが」

「まさか、この方とつつつ付き合ってたっしやるの」

「ベベベべつに私達は」

「そうだぞ、ただの幼馴染なんだから」

鈴が少し不機嫌そうになる。

「どうした？」

「何でもない」

「そうか」

まったくきづかない一夏は箒達に話す。

鈴は箒が引越したすぐ後にやってきたセカンド幼馴染ということだ。

「ファースト……」

箒はうれしそうな顔をする。

ファースト「特別という図式が浮かんだようだ

その時、完全に空気状態のセシリアが咳払いをする。

「私を忘れてもらっては困りますわ

私はセシリア・オルコット。

イギリスの代表候補生ですわ。

先日一夏さんと暮らす代表の座を賭けて——」

「デザートとってくる」

「まだ食べるのか？」

「頭脳労働は苦手なんだよ」

セシリアが話してる間に巨大なパフェを取ってくる。

こんなデザートまで完備してるあたり流石IS学園だ。

「模擬戦の事忘れるなよ？」

「わかってるよ」

「模擬戦って一夏がこいつとやるの？」

「ああ。インドの代表候補生らしいから胸を借りるって奴同然だけどな」

心のスイッチがONになっていないと一夏もへたれる。

「あんたって代表候補生だったの！？
それもインドの」

「言うような事でもないだろ。」

俺だってお前が代表候補なんて知らなかったんだから半々だろうが」

「それもそうね…一夏、私も行っていい？」

「別にいいぞ」

「同じく」

「無様な姿見せたらたつぷりしごいてあげるわ」

「お・・お手柔らかに頼むよ」

「ちょっと!!聞いているんですの!!?」

「ごめん。私興味ないから」

「同じく。」

言葉で自慢するより腕っ節見せてくれたほうがよっぽどわかりやすい」

この間に特大パフェが3分の1減っている。

「あんた、たまにいい事言っじゃない」

「たまには余計だ」

「言ってくれますわね...」

セシリアの周りから憤怒のオーラが出てくる。

その後も付き合いの長さやタイミングやら鈴の店で食べさせてもらっていた事やらで軽く口論になった。

そして放課後になる。

「ルールは簡単だ。

おまえは一撃まともに入れたら勝ち。

俺はお前のシールドが0になったら勝ちだ」

「ひどいハンデ戦だな」

一夏の顔が少し不機嫌になる。

実力差はあるだろうが一太刀浴びせるだけならそれに全霊を叩き込めば可能性は十分ある。

それに単一仕様能力の零落白夜を使えばあらゆる防御は無意味同然になる。
ワン・オフ・アヒリテ

つまり条件的にはこっちよりだ。

「殺し合いは圧倒的なほうがいい。

喧嘩は互角価格上の方が良いってのが持論でな。

これで互角ぐらいなんだよ」

「そうかよ。

後悔するなよ」

そう言つて一夏はISを起動させる。

白がメインの刀を持ったIS。

名前は白式。

唯一無二の武装を極限にまで突き詰めていく超攻撃特化のISだ。

「それがお前のか。
いい獲物盛ってんじゃないか」

「ありがとよ」

構える一夏を見てシドは笑う。

「だったら俺も少し見せてやらねえとなあ!!」

そういうと同時に腰に巻いていた黒いベルトが発光する。
光に包まれたと思った瞬間には、姿が変わる。

大きさはシドより少し大きいくらい。

両指は鋭くとがり

両の爪先は軍用靴のように重厚で

全体的に流線型な——真っ白い全身鎧の姿に

名前はネームレス（無名）。

白式と同じ一点特化ながらも万能型のIS。

あらゆる機能を犠牲にして攻撃性のみを追求したISの、『加減した』姿だ。

着火1 転校生は不良少女？（後書き）

次回は白式対ネームレスです。

とりあえずシドが無双します。

白式以上に無茶苦茶な仕様だからいいよね？

着火2 炎と白夜（前書き）

この話しには独自設定入ってます

あと一夏にとつてのまともな一撃は零落白夜を決めることです。
一夏は威力を聞いてはいいますが、いまいちピンときていません

着火2 炎と白夜

「そんじゃまあ…こいや」

そう言っでシドは構える。

右腕を甲を見せるようにだらんと伸ばし、半身になって一夏と相対する奇妙な構えだ。

全体的に弛緩した緊張感のない構え。

奇妙ながらもじっくりくる。

おそらく試行錯誤の末たどり着いた我流の極致。

戦って戦って戦い抜いて染み込ませた一つの武器
そついったものを一夏は本能的に感じ取る。

（一撃だ。一撃に全力を込める！）

一夏はアリーナの端まで移動する。

最大速度を乗せるためだ。

そして相手は地面に立っている。

そのままなら踏み込みの力を利用して重みをあげる事もできる。

（集中）

ゆっくりと息を吸いながら光の刃——零落白夜を発動させる。

「い…く…ぞおっ!!」

——氣に解き放つと同時に最大出力で加速する。

最大出力なら量産機はおるか一部の専用機すら上回る白式の超加速。
その姿はまさに白い流星。

そのその勢いを　踏み込みの力を利用した一撃が振り下ろされ

「いいじゃねえか。

攻撃に遠慮がなかった。

全力で倒すって気持ちが入められてた」

「なっ」

一夏の顔が驚愕で歪む

振り下ろした刃が

シドからはずれていたからだ。

「もつとだ…もつと見せてみる!!」

シドは一夏の腕をつかんでとび蹴りを放ち、距離を作って構える。

「てめえの全部をぶつけて来な。
潰してやるからよお」

「何が起こったんですの!!?」

遠くから見ていたセシリアも驚いている。

素人が見てもアレは直撃コース。

それなのに外れた。

その理由がわからなかった。

「セシリア…どうやらあいつはかなりやるようだぞ」

篤が驚いた顔で言う。

「どういうことなの？」

「まあ見てなさいよ。あいつの手をね」

そう言って鈴は椅子に座り、ISを部分展開する。
こっちのほうがよく見えるからだ。

「はああああああああ」

一夏は高速で雪片式型を振るう。

上下左右あらゆる角度から振るい、時にフェイント、時に手足を織り交ぜ、時に背後や真上から攻撃するが一発も届かない。

要所所で零落白夜を発動させて威力を上げているのにも関わらずだ。

（何で…

なんで弾かれるんだ…）

守りを無意味にする零落白夜の斬撃は、全て右手一つで弾かれていた。

「があっ！！」

弾いた瞬間に懷にもぐりこまれて腹を殴られる。

（タネはわからないけどそれ以上に…こいつ、カウンター合わせる

のが恐ろしくうまい！！）

攻撃を止めれない所まで引き付けて弾き、あるいは避け、拳や蹴りを決めてくる。

空に飛んでくれれば足元から攻める事もできるが、飛ぶ気配がない。こちらがどれだけ意表をつこうとしてもことごとく対応してくる。

「どうした？」

そんな程度じゃ俺は斬れねえぞ！！」

雪片式型を右手で叩き落してよろけさせ、首をつかんで腹に膝を突き刺す。

絶対防御が発動しない微妙な力で攻撃されてる為意識が根こそぎ奪われかねない。

だが――

（な…めんな！！）

腿を掴んで全力で右に投げ、加速する。

（この状態なら！右手も使えないだろ！！）

シールド殺しを防ぐ種はおそらく右腕に装備された何かにある。

下がる時の速度から予測すると、こっちのほう格段に早いから間合いにさえ入れればよける事はできない。

たとえ小回りの利きが上だとしても地面すれすれの状態で上から被されば左右以外の逃げ場はない。

「くら　えっ」

一夏は真上から逆胴に斬る。
だが、それは回転しながらの右腕ではじかれる。

「いい作戦だったが——」「一発で決めれると思ってない」！「！」

はじく勢いを利用して離れようとしたシドが一瞬見たのは——一夏の笑みだった。

「じふあっ」

瞬間、シドが何かに叩き飛ばされる。
そのまま数mとび、着地する。

「……面白い事やるじゃねえか」

瞬時に肉薄する一夏の右手を掴み、指をへし折ろうとする。
本来なら指ごともぎたいところだがISの駆動部に支障を与えるの
程度に留める。

その中で一夏は言葉を吐く

「悔しいけど、お前は見切るのが上手い上にISは周りが全部見えるから不意打ちも満足にできない」

一夏はヘッドギア部分で頭突きを叩き込む。
頭もカバーされているとはいえ結構効く。

ISは使用者がどれだけ無茶をしても気を失わないシステムがある
が、起動するまでに一瞬だけ間がある。

「そんな奴に一撃当てるなら」

その瞬間を付くように左手で右腕を掴んで振り下ろす。
だが無意の内に腕を掴まれていたようで、停止する
しかし出力は白式が上だから確実に押し込んでいく。

「これくらいのことはしないとな」

「一夏の奴…」

武器対素手の戦い方を教え直さなかった事（ISと剣術で暇がなかったが）を悔いながらも筈は逆転しそうなを見て少し嬉しそうな顔をする。

「まあ、あの感じじゃアレくらい意表つかないと当てれそうにないからね」

一夏が取った戦法は性能差でごり押しできる状況に持っていくこと。
不本意だろうが技量差が圧倒的なら絶対不変ともいえるISの差に賭けるしかない。

そして白式の翼を叩きつけるという奇策によって状況は作れた。

「そうですね…まさかあんな手段で一夏さんの攻撃を防ぐなんて…」

「世の中には真剣を素手で捌く技術があるが、あの女が使っているのはそれに近い。

構えの適当さからしても武芸を嗜んでいる訳ではないだろうが、我流であそこまで練り上げるのには相当な年月がかかる。

「いったいどれだけ修羅場を潜って来たんだ」

剣術の道を行き、かなりの腕前を持つ箒から見てもシドがやっている事は桁違いだった。

そして強い人間と戦いたいという箒の中の危うい部分の一欠が出てくる。

「遠目で見れば簡単な事よ。でも、簡単すぎて一夏じゃ気づかない。あいつは変な武器を使ってるんじゃない……」

鈴の言葉を箒が繋げる

「シールドで防いでるんだ」

「それはわかったのですが、どうやって防いでるのがわからないんですの」

「千冬さんが言うには、雪片は刀としての性質が強い分刃か峰の部分以外……つまり刀身部分の威力はあまりないらしい」

それでも十分らしいがなと付け足す。

「基本的に避けるしかないが、しのぐ方法がないわけでもない……逆属性の単一仕様能力だったり物理的な手段で一瞬でも刃を止めて流す然り」

「あいつがやってるみたいにバリアを一点集中させて弾いたりね」

ISは最終防御手段ともいえる絶対防御を切る事はできない。だが通常バリアは話しが別だ。

設定しだいで範囲をいくらか広げたりできる。
そして逆に一点のみに集中させる事もできる。

無論そんな事をすれば他の部分の守りが無くなり、ほぼ全身が絶対
防御の発生圏内になる。

そんな事ができるのはよっぽどの馬鹿ぐらいだ。

「とはいえ、それでもある程度は影響を受けているだろうな……」

（聞いてたから対策は打ったが、それでも削れてるってのは無いだ
ろ……）

シドの右目の下に移る数字が四分の三程度まで削れている。

一瞬ずつしか触れていないのにここまで削れるあたり大概な能力だ。

「唯のナンパ野郎だと思ってたが、案外やるじゃねえか」

「ナンパって…硬派のつもりなんだが」

「ブハッ!!」

シドは突然噴出す。

「何だよいきなり!!?」

「お前、アレで硬派のつもりか?!」

アレか!!?

ブス専って奴なのか!!?」

「俺はノーマルだ」

「そうなのか？」

俺的にもいい女ぞろいなのに一切見向きもしないからてつきりホモが枯れてるかブス専だと思っただがな」

「なわけあるかあっ!!」

白式のブースターを吹かせて空中まで持っていく。

ギャグに見えるがこれで防御範囲は格段に狭まったし、踏み込みを利用した高速接近へと格闘も使えない。

「認めたのと笑わせてもらったついでによお……」

一夏の腕が「止まる」。

「ちっただけ……」

ネームレスが黒く染まっていくのに比例して押し返されていく。

「なっ　に……」

「力出してやるよお!!!!」

全身がメタルブラックに染まった瞬間——　一夏が地面に激突した。

「お前…手加減してたのか？」

埋まっている体を引き出しながら一夏は言う。
殴り飛ばされたのはわかる。

だがその重みが今までとは比較にならない。

「俺は手を抜いても手加減はしねえ主義だ。

俺のは燃費が悪いから抑えてただけだ」

「少しだけ力入れてやるから」

シドの体からさっきまでと違って突き刺さるような気が発せられている。

そして新しい物が立ち上ってくる。

表現するなら、毒気のような何かだ

「
死ぬなよ」

言った瞬間

シドが一夏の目の前に立っていた。

「!」

シド拳を振るのとほぼ同時に一夏が刀身でガードする。

ブースターを最大にし、全力で踏ん張っていたにもかかわらず一夏は一瞬で吹き飛ばされる。

（吹き飛んだ上に腕がしびれるって………どういうパワーしてんだよ）

態勢を立て直し――
黒いものに真正面から飲み込まれた。

「火炎放射って……的外れもいいところよ」

鈴の言うとおり速度が高が知れてる火炎放射器なんて、ISバトルでは旧世代の兵器よりも役に立たない。

「というか、何ですのアレは！！黒い炎なんてこの世にはありませんわよ！！」

「大丈夫だセシリア。世の中には高温すぎて無色透明な炎もあるらしいからな」

箒の眼がなんかヤバイ光を帯びている。

シールドを削って戦う白式の性質上アレだけの規模の攻撃を受けたらどうなるかわからないから惚れてる人間としては当然だ。

「安心しろ。見た目だけで中身はねえよ」

遠くから言ってくるシドは両手から炎を放出している。

「とはいえ、結構熱いから……死んでるかも」

自分で任務おしゃかにするって……下手すら処分ものだぞ。
生きてりゃいいんだが……

「だれが……死ぬか……」

炎を切り裂いて一夏が飛び出てくる。

だが一夏の顔は、けっこう青くなっている。

本来ならどれだけ無茶な動きをしようがどれだけ高速で動こうがISが呼吸の補助してくれる。

が、元になる酸素がなければそれも大幅に阻害されてしまう。要するに一夏は軽い酸欠状態だ。

（胸が苦しい。体が言う事をきかない……息を……もっと息を）

「こっちに来い」

深呼吸をしようとする前にシドが動く。

炎の壁が生まれるが、それは一夏を狙ったものじゃない。

高温と低音の炎の温度差で空気の流れそのものに干渉して引き寄せ
るためだ。

「!!!??」

本来なら振り切れるはずだが、酸欠状態で頭が回らない一夏では上手く逆らえない

「てめえ弱いにもほどがあるだろ。」

力もねえわ心もたいした事ないわなんて雑魚しかねえだろ」

動きが鈍った所をUSJのマークのあれ並みの火の玉を投げつける。
一夏は右に飛んで交わすがそれにあわせて接近したシドが首を掴んで壁まで飛んで叩きつけ、めり込ませる。

「例外ってのは何かすげえ事できるもんなんだろ？
ゲームでも漫画でもリアルでも相場が決まってるじゃねえか」

雪平二之型を振るうとする腕を砕かんばかりの力で蹴り、落とさせる。

「俺だつてな、弱くてもまあ仕方ないって思ってたわ。

IS乗ってちよつと経っただけだしさ。

けどここまで期待はずれじゃがっかりだわ」

頭を掴んで締め上げ

「ガツカリ過ぎて——」

口を耳元に近づけ

「お前の大事な奴らに何するかわからねえぞ」

言い放つ

「!!」

そこには怖気が走るような何かがあった。

一夏の精神を一瞬で高ぶらせるだけの何かがあった。

「ふっ ざけん なあっ!!」

一瞬で沸騰した一夏は

装甲が砕けるほどの左拳を鳩尾に突き刺し、連打する。

「ぐっ」

ダメージで一瞬よろけた所で腕を振り払い、軽く離して回し蹴りで吹き飛ばす。

「やらせるかよ……数馬も 五反田も 蘭も 束さんも セシリアも 篝も 千冬姉も誰も!!」

雪片式型を掴む一夏の目に、先ほどまでとは違う種類の輝きが宿る。

「くくく はははははは あ~~~~ はははははは!!」

ようやく火がついたって感じだな

どうやらてめえは他人の首がかからねえと駄目みたいだなあ
いいぜえ ようやく楽しめそうだ」

両手から炎を出しながら隙だらけの状態で立つ。

だがそこからにじみ出る何かが告げる。

あれが本来の構えだと。

合わせる気など毛頭ないといわんばかりの攻撃的ながらもよくわからない気配。

それが雄弁に告げている

（弾かれようが防がれようが関係ない!!）

正真正銘の一撃で沈める!!）

零落白夜の光が日本刀サイズまで圧縮され、それをバットを振った後のように大きく構え、前傾姿勢をとる。

最大限にまで力を振り絞り、最高の一撃を叩き込む。

技量というよりも先読み能力で軽く上を行かれている時点で技は無意味。

なら、一発に力を込めたほうがよっぽどましだ。

「やっぱ喧嘩はこうでなくちゃな。」

お互いの中身吐き出して何もかも忘れられるくらい潰し合って
後先考えずに殺り合ってよお

折ったり

砕いたり

ちぎったりして

楽しもうじゃねえか」

狂気染みた台詞ををはきながら圧力を高める。

数泊の間が空き、たがいに一瞬で接近する。

速度はネームレスのほうが格段に速い。

質量は白式が上で総合的に見れば互角。

だが一夏は理解していた。

このままでは負ける。

ネームレスから受けた一撃から、ISの出力は向こう上だと理解した。

そのうえ小回りはあっちのほうが利く。

間違いない避けられてカウンターを決められて負けるのが見えていた。

だが

（それでも——勝つ——！）

シドを止める

勝算はとても薄い

だけどそれでも止める。

絶対に止める。

死んでも止める。

（だから！！）

拳と刃が工作しようとした瞬間――

キンコーンカーンコーン

終了時間のチャイムがなり、そのまま本体が激突して吹っ飛んだ。

「えっ…あれ？」

一夏は何が起こったかわからない。

「ざっけんなよおい！！

こちらら漸く喧嘩出来そうな奴みつたんだぞ？

それを邪魔するなんてざけんじゃねえぞおい」

ヒビだらけの鎧から血の色のような炎を噴出しながらシドは叫ぶ。

溶け出している地面からその怒りが見て取れる。

「あゝゝ興醒めだ…帰る」

そう言つてマグマから抜けて解除しようとする。

「その前に」

誰かの声が聞こえてくる。

一夏は震えながら声のしたほうを見る

「お前たちの罰則を発表してもかまわないか？」

「千冬姉」

強烈な気を発する千冬がたっていた。

（これだけの気迫を出せるのは、ゴミタメでもこんな奴数人しかないぞ）

シドは千冬の放つ気に驚いている。

だが量はともかく質が悪いと結論付ける。

「織斑先生だ。」

最初に言っておくが壁の修理代はお前達が一部（一夏2…シド8）負担で、

罰則は生身での地面の補修と反省文だ。

用具は織斑が知っているからさっさと行け」

マグマ化した地面に水をかけて冷まし、ピッケルで碎いて土をかけ

て補修するのに大分時間を食った。

その中でシドはさっき言ったことは冗談だといったが、あのときの言葉の響きを感じ取った一夏は、どうにも信用できなかった。

白式もネームレスもはだいぶ破損はしたが、中身は無事なのでHRまでには直るし、白式の翼もクラス対抗戦までには直るといわれたのを追記しておく

着火3 肯定と否定とあとなんか（前書き）

なんか一夏アンチくさい。

でもなんとなく感じた事を書いただけです

着火3 肯定と否定とあとなんか

深夜、シドは屋上に一人座り、虚空に向けて話しかけていた。

「調査（クラスメイトにそれとなく質問）の結果オリムラ・イチカはNOと言わないといけない状況や他人がかかっている状況でもない限り火が入らないらしい。

捕獲するなら一対一が丁度良い」

了解…他は？

シドの耳に不気味なほど美しい声が響く。

通信先は、名と体を国に捧げたらしい、シドのいる所のトップだ。

「シノノノ・ホウキはシノノノ・タバネをかなり嫌悪してるようだ。その辺はもらった資料に書いてる通りだろおな」

少しだけ話題になった時に、箒が恐ろしく機嫌を悪くしていた事からも大分嫌っているようだ。

ええ。

彼女によって世界は大きく変わった。

その皺寄せが一番及んだのは軍と彼女の親族…とくに両親や彼女でしようからね

声からは侮蔑の響きがする。

残りは白式と周辺の警備状況ですね。

君の見解は？

「セキュリティは強行突破するにしても、昼日中に運ぶのは無理だな。

最悪代表候補生軍団＋国家代表＋教師ども＋最強クラスのＩＳのパイロットを一人で相手する事になるからな
なるべく避けたい」

君なら皆殺しにしようと思ったんですが、予想外だよ

「殺すのはともかく殺されたくないかねえよ。
だからやるとしても夜中。

その上そっちに飛び火しないように俺がやった証拠を残しちゃ駄目ときた。

正直無理ゲー感漂ってんだがどう思う？」

——まあ仲間にできるならやってくれ。

そっちのほうがスマートだし、当たり障りもない。

最悪の場合『彼女』を「やめろ」

その先を絶対に言わせたくないようにシドが言葉をかぶせる。
それはまるで悲鳴のようだった。

「他の奴らはいい。ピスキスもまだ良い。だけど

だけどあいつは呼ぶな――！」

わかった。けど、最悪の場合、『彼女』を使う。
それを忘れないで欲しい

「……………解った」

僕の計画の為には莫大な戦力がある。

制約を解除するヒントになる織斑一夏と白式。

ISのコアの製造法を知る篠ノ之束。

これらを手に入れてようやく僕の計画は最終段階を発動できる

「お前が前に言ってた、百年の安定って奴のか？」

そうだ。世界は勝者と敗者しかない。

今の世界は篠ノ之束が勝者の世界だ。

だから僕達は…オシリスは彼女を敗者に突き落とし、勝者になる

そう言い残して声が途絶えた。

「くっだらね……勝者とか敗者とか。

在るのは生きるか死ぬかだけだっつの」

シドはは吐き捨てるように言って、帰っていった。

翌日、シドが教室に入ってみると、

「何を悩んでるんだ？」

一夏が唸っていた。

「シド……毎日酢豚を作ってくれるって言われたら、おまえはどう

思う?」

昨日会ったばかりの人間に聞いてくるあたり、本気で困っているようだ。

「奢ってくれるってことだろ?」

「だよな〜」

「で、それがどうしたんだ?」

「じつはな…」

話を要約すると、鈴との約束を覚えていたのになぜか怒りを買ったらしい

「酢豚を毎日作ってくれるって、奢りって事だよな。よかったじゃねえか」

中に込められた意味に一切気づかないあたりシドも結構アレな人間だ。

「けど、何で怒ったんだ?

箒に聞いても「馬に蹴られて死ね」って言われたしさ。何でなんだろう」

「わかるわけねえだろ。

まあ多分あれだ、おまえも何か作ってやらないとだめなんだよ。あっただけが作るのはフェアじゃねえからよ」

「なるほどー!!」

こんなので納得してしまうあたり唐変木・オブ・唐変木ズだと思う。

「けど、何がいいとおもう」

「逆に聞くが、何が作れる？」

「世間一般のなら、大体は」

「……ハンバーグで良いんじゃないか？」

旨けりや何でもいいので適当に思いついたのを言う。

「そうか!!今夜作るから、味見してくれないか？」

IS学院は全寮制で食堂もあるが、部屋には簡単な自炊設備（コンロ、レンジ等）くらい在る。

性能もそれなりのものを作るくらいいいものだ。

「何でだ？」

「オレって料理ってここ最近千冬姉以外に作った事がないからさ、他の人に食べさせるのに自信がないんだよ」

（接点持つのにゃ便利だし、乗ってやるか）

「……不味かったら承知しないからな」

「任せとけ」

学校が終わり、先に待っていてくれと言われたのでシドは一夏の部屋に入る。

「お前は…」

着替えていた箒は驚く。

「ホウキ……お前が一夏の同居人か」

「一夏に用事があるのか？」

箒は警戒するような目を向ける。

「飯食いに来た」

「……どういうことだ？」

「イチカがチョットばかり頑張る事があるから、手伝いだよ」

「そ…そうか」

（私を頼ってくれてもいいのに……）

箒の雰囲気は暗くなる。

「おいおい、どうした？」

あの日か？」

「女の子があの日とか言うな」

「まあそりゃそうとして、一夏が来る前に聞きたい事があるんだがよ……」

「何だ？」

「泊間をおいてシドは言う。」

「姉貴の事、どう思う？」

シドの言葉に箒は眉間に皺を寄せる。

「……何が言いたい」

刺すような視線を向けるがシドはまったく動じない。

「お前の姉がえらい事になったら、お前はと思う？」

姉を連れていかれたり、殺されたりした場合の箒のアクションを知る必要があるとかは考えていない。

精々「やりすぎて」怒り狂って向かってこられると面倒だと思ってる程度だ。

「なんで、そんなことを聞くんのだ？」

「単なる興味本位でしかねえよ。」

世界一つを変えた拳句に失踪した人間の家族の心境つてのが気になる
ってな」

それ以外の感情を感じなかったからなのか知らないが、箒は口を開く。

「……わからない。

あの人がやった事を許す気にもなれないし、あの人のせいで私も大変な目にあつた。

正直どうにでもなつてしまえと思わないわけではないけど、それでも…姉だからな。

何事もなく生きていて欲しいとも思つてしまう」

向うが引つ掻き回すだろうがな。

と言いたい所を飲み込む

「家族だからか？」

「ああ。そういうお前はどなんんだ？
家族が大変な事になったら、どうする？」

「……わからん」

「？」

「親なんてもんはずつといなかったし、ましてや家族なんてもんはいなかった。
いたのは敵と味方と

ちよつとの間守つてくれた奴だけだ」

箒はシドの言っていることの意味を察する。

「すまない」

「謝る必要なんざねえよ。」

いないのが当たり前だったからそういうのはよくわからねえし、困った事はねえよ」

「……」

「俺が欲しいのは力だ。」

権力、暴力、武力。

そついった括りなんてない力だけだ」

シドは右手を握りながらつぶやく

「家族とか友達とかそついうのは弱くするだけだ。」

他の奴らは知らねえがな」

「……」

「今度はこっちが聞くが、お前はイチカの事をどう思つ？」

「なっ　　なななな」

箒は顔を真っ赤にして後退りする。

「俺はどっちかっていうと、嫌いだ。

あいつは守りてえモノが在ったり自分のプライドかける事になった
ら強いが、それ以外はからっきしだ。

要するに、あいつ自身が自分で引き出す強さってのがねえ」

「引き出す…強さ？」

「ああそうだ。

アイツは大事なものがかったら強え。

けど、何もかかってないとこれ以上なく弱い」

「それでいいじゃないか。

守る強さのほうがいい。

少なくとも、自分の為だけに振るう力よりは遥かにいい」

箒はまるで自分に向けるかのように言う。

「おれにゃあわかんねえ強さだな。

けど……アイツはなんていうかな、何か違うんだよ」

「違う？」

「どう説明すりゃいいかわからねえが、例えるなら…あいつの強さ
ってハリボテみたいなんだよ」

「ハリボテ…だと？」

箒の機嫌が目に見えて悪くなる。

「ああ。」

赤の他人だから言わせてもらうが、あいつあ外見だけ立派に取り繕ってるけど中身がすつかすかだ。
アイツの芯つてのがみつからねえ」

芯とはそいつの在り方の中心になるもの。

それは信念、義務、友情、愛情 e t c e t c …… 様々な形で存在する。

それが強固な人間ほど絶対的な差があっても意志の力で向かってくる。

シドにとっては腕っ節と同じくらい怖いものだ。

だけど一夏の場合。

ハリボテを固定する針金のように外側を強固にする。

頑丈に見えるが中身がないから実際はとても薄っぺらい。

そういったものをシドは感じていた。

「だから面白くはあっても怖くはないんだよ。

まあこれは格闘家同士が殴り合ったら互いの事が理解できました理論みてえなもんだし、昨日会ったばかりの人間の言葉だから、気にしないでくれや」

「あ…ああ」

悪く言ったかと思うと弁解をする。
いまいち何がしたいのかわからない。

「で、お前は？」

「わ…私も言わなきゃダメか？」

箒は赤くなりながらたじろぐ。

「おう」

「……………放っておけない幼馴染だ。

アイツは人の気持ちも知らないで無茶もするし、鈍感だし、軟弱モノ、馬鹿だし、優しいし、案外気が利くし、いざという時頼りになるし、それに……」

（お……い。どんどんほめ言葉になってるぞ）

シドは呆れながらも暫く聞く。

「というわけだ。わかったか？」

「ああわかったよ。お前がイチカの事を気に入ってるってことはな」

「ふざけるな！！私はアイツのことなんか——」

「そこまで言えるって事は十分注目してるって事だろうが」

正論過ぎて箒は詰まる。

「まあなんだ。

ぐずぐずしてたら、イチカは俺が貰うぞ」

シドの言葉を聞いて箸が立ち上がろうとしたその時――

「ただいま〜〜〜」

一夏が帰ってきた。

「上がってるぞ」

「ああ。すぐに作るから、待っててくれ」

「二十個くらいな」

「……どれだけ食べるんだよ」

「そんだけ。」

それに、作れるだけの金は払ったぞ」

「サラダとか食ってバランス取らないとだめだぞ」

「んなもん知るか。」

野菜なんて適当に食っとけばいいんだよ」

それでもボウル3杯は行く。

「それだけ食って太らないのか？」

「もんだいねえよ。」

俺の体、頭使い始めたからかしらねえがここ数年燃費悪いんだよ。前までは一日一食で持ってたのに」

「「極端すぎる……」」

主夫技能B+な一夏がいったいどういう食生活を送っていたのか突っ込めないくらい極端な差だった。

「とにかく、旨い飯作ってパンダちゃんに食わせてやれ」

「おう!!」

「チョット待て…いったい何の話だ？」

「筈。俺わかったんだ。」

鈴が怒ったのは、鈴だけが奢るのがフェアじゃなかったからなんだ。だから、俺も毎日とまでは行かなくてもしょっちゅう何か作ろうと思う!!」

「試食の時は呼べよ。
金払うから」

「十人前とか作りたくないから。
オレ料理人目指してないから。」

「一夏……カナラズコロス」

突入を試みていた鈴がさっきの会話を聞いてしまい、更なる怒りを滾らせた事を

着火3 肯定と否定とあとなんか（後書き）

部屋の調理設備は多分オリジナルです。

ホテル並みにいい部屋だからそれくらいあると思ったから入れてみました。

原作で出てこないのは基本的に学食とかで十分だからだと思ったからです

後シドは一夏にほれていません。というか惚れる予定はありません

着火4 修行パートってセンスが問われると思う今日この頃（前書き）

ニコニコ大百科でいろいろいつてる奴がいるので、ソノウチ超展開
やってやるうと思う今日この頃

着火4 修行パートってセンスが問われると思う今日この頃

着火4 人には意外と弱点がある

一夏がシドを部屋に入れてから3日後

一夏とシドは額をつき合わせてうなっていた。

「イチカ… ということだろうな」

「ああ… なんてだろうな」

互いに疑問を同時に口にする。

「「^{バンタちゃん}何で鈴はあんなに怒ったんだ？」」

アレから二人であれこれ準備をして鈴を呼びに行ったら、某ヤクザゲームばりの殺人ラッシュを受けて文字通り窓からたたき出された。正直白式を起動できなかったら死んでいたと思う。

「料理は完璧だった（最終的にパスタになった）。場所のセッティングも雰囲気重視した（学園の屋上（芝生つき））。
なのになんで怒る」

筈に聴いてみたら真剣の峰でぶつたたかれた。

「やっぱり制服じゃ華がなかったか？
スーツとドレスでびしッと決めとけばよかったな」

「それかもしれないけど、意外と高いんだぞ…」

「俺がくれてやるよ。」

金は無意味なくらいあるが使いかたがわからねえ」

「金は貸し借りしない主義だ。」

それよりも、どうやって鈴と話すかが重要だ」

アレから鈴は百回殺せそんな視線を向けてくるようになった。
なんとか怒りを静めないと話もできない。

「クラス対抗戦で適当にボコられるか、勝つしかないだろうな」

「そりゃ、勝つしかないだろ」

ボコられる方は無しだ。

わざと負けるのは性に合わないし、何より色々教えてくれる箒やセシリアに失礼だ。

箒は擬音祭で解らないしセシリアは理屈っぽくて解り難いが、教えてくれることには変わらない。

というか勝たないと鈴に殺される道しか見えない。

「お前がわざと負けるようならここでお前をぶっ殺してやるどころだったんだが、安心したわ」

訂正。今死ぬかもしれないかった

「よっし！！それじゃあ行くか」

シドは立ち上がった一夏の手をつかむ。

「行くって、どこに」

「決まってるんだろ？アリーナだ。

本番までにみっちり喧嘩の仕方教えてやるよ！」

「教えてくれるのはうれしいけど今——」

「安心しろ。当日までには立派に育ててやる。
命がけでな」

物騒な台詞を吐いて連れて行こうとして

「あたっ」

シドは誰かに激突する。

「その前に……」

「……おはようございます」

「ああおはよう。挨拶ついでに席についてくれればうれしいんだが」

「千冬姉……」

「織斑先生だ。いいから席に着け」

「ふっ　たとえばお前が何者でも俺に命令できるのは俺だけっ」

シドは千冬の出席簿ラリアットを受けて（しかも喉のいい感じの所）

反対側の壁まで飛んでいく。

「いいから着け」

「……りよ……かい」

シドは喉をさすりながら立ち上がる。

どうやら、あまりこたえていないようだった。

それから一夏はシド、箒、セシリアの三人によるいじめとしか言いようがないスパルタ特訓を受けた。

具体的には

箒の場合

「箒…なんで銃持ってたんだ？」

一夏の言うとおり、箒はなぜか銃を持っていた。

箒は遠距離より白兵の方が得意なのは昔の記憶を掘り起こしても変わらない。

要するに、銃を持ってくる理由がわからなかった

「今回は防御を重点的にやっていこうと思ってな。借りてきた」

「そっか…」

（なんかいやな予感がするけど）

「いいか一夏。」

剣で遠距離武器を相手にする場合は幾らかやり方があるが、今回はライフルのような単発武器をを重点的に教える事にする」

刀身を垂直に構える

「こうビシッと構えて体をキュツとしてガキンと弾くんだ!」

「できるかそんな漫画みたいな技!」

擬音だけでわけがわからないが、銃弾を刀身で弾けと言いたいのだけは解った。

解りたくなかったが解った。

「安心しろ防ぐというよりも銃口を見て逸らす感じだから問題ない」

「おおありだ~~~~~!!」

それからセシリアの番が来るまで、銃弾を刀で弾く羽目になった。正直昔の光景が見えた気がしたのは、気のせいではない。

セシリアの場合

「いいですか一夏さん。

空中戦における 機体制御のコツは――」

以下延々と体の角度やめんどくさいような用語が飛んでくる。

正直理屈っぱ過ぎてよくわからなかった。

シドの場合

グラウンドの中央に、一夏はぼくっつと立っていた。
少しすると、二本の鉄パイプと一振りISのような木刀を持ったシド
がやってくる。

「今度は何をやらせる気だ。生身で弾丸をよければいいのか？」

正直一夏精神的にきていて、大分投げやりになっていた。

「いきなりそこに連れてくほど俺だって馬鹿じゃねえよ」

なにやら不穏なことを入った気がするが、精神衛生上無視する。

「俺の授業じゃISは使わない。

俺が教えるのは喧嘩のやり方だからな」

そう言つて木刀を投げて渡す。

「雰囲気重視でホウキの刀を借りようと思ったんだが、断られた」

まあギャグでもないのに真剣を使うのはアレだから当然だ。

「こんなもん使つて何すんだよ」

「俺と打ち合え」

「は？」

唐突な言葉にぼかんとする。

「前にも言ったが俺は学がねえし口で語れるほど器用じゃねえ。やれることなんざ体に直接刻み込んでやるくらいだ」

言いながらテープを握るところあたりに巻いていく。

「ホウキが言うには十分鍛錬は積んでるらしいが、鈍りきったお前は弱い。」

体に刻み込んだ技術は部隊長殿みたいな目に合わない限りは消えることはねえ。
「だったら無理やりたたき起こすしかねえ」

「何が言いたいんだよ」

ものすごくいやな予感がした一夏は刀を構える。

「ようするにだ…」

一瞬で一夏の前まで接近する。

数？程度なら歩法を駆使すれば拳動なしで接近することができる。だが彼女の場合技術もへったくれもない。

化け物染みた力で身体の制御、駆動を同時に行ったのだ。

一夏は何とか防ぎ、押し返す。

「死ぬ気で打ち合えばちったあマシになるかもって事だ。というわけで加減はするが、死ぬなよ」

そう言って構える。

（二刀流のセオリーって片方が受け担当だけど、こいつの場合――）

左右にフェイントを入れながら左のパイプを叩きつける。
防ぎ、払って反撃しようとするがシドは反動を利用して真上にジャンプする。

（どういつ筋肉してんだよ！！）

攻撃の反動を利用しながらの軽やかな跳躍。
相当な反射神経としなやかな筋肉がないとできない芸当だ。

「てらあああつ」

逆胴からの顎めがけての切り上げ、袈裟切りと見せかけての刺突、
打撃をかわしての拳などフェイント、木刀以外の戦術を駆使する。
だがシドは片っ端から弾き、要所要所で拳を急所にめり込ませる。

「くっくっく」

鼻、こめかみ、乳様突起、肝臓、顎、後頭部、肝臓、鳩尾、腎臓、
脇の下その他多数を痛い程度の力で殴られる。

（くそっ…あの時と同じでこっちの攻撃を全部防いでくる！！
桁違いすぎるぞ！！）

攻撃力もハンパナイがそれ以上に防御技術がとんでもない。
どちらかというと先読み能力が桁外れなんだと思うが、攻撃が通らない事実には変わらない。

「喧嘩殺法その一。相手の急所を狙え。
ISも結局人間が使ったから当てれば怯ませるくらいのことはで

きる。」

言いながらシドはパイプをくるくると回す。

余裕というよりも呼吸に近い動作で回転速度を上げていく。

（落ち着け。

あっちの守りがハンパなもんじゃないのはわかってたはずだ。それに、あの時だって当てることができたんだ。

あいつの意表をつければ——）

「喧嘩殺法その2。

相手の意表をつけ」

そう言って片方のパイプを投げる。

当たれば切断はなくても肉の一部は持つていかれる。

「！！」

一夏はしゃがんで避けるがそこめがけて蹴りが飛んでくる。

「ぐっ」

左腕を盾に防ぐが、ガードごと吹き飛ばされる。

鈴よりも低いのに力の差がありすぎる。

その上低身長な分小回りも利くからたちが悪い。

「その3！！相手をひるませたらすかさず追撃！！」

転がる一夏めがけて接近し、パイプを振り下ろす。

一夏はさらに転がって避け、反動を使って立ち上がる。

「そっぴやお前、鉄パイプで戦うってどこの不良漫画だよ…」

「それ以上によお…俺らの構図の方が不良漫画だろおが」

一夏↓学生服、木刀装備

シド↓学生服、鉄パイプ装備

「確かにな」

一夏はにやりと笑う。

こいつと戦っていると楽しくてしかたない。

これ以上なく単純に戦意を向けてくるこいつと戦うのがうれしくて仕方がない

単純に自分の力を試したいと思って仕方がない

「それじゃあ授業の続きと行こうかああっ！！！！」

「いくぞおっ！！」

一夏は木刀で地面を削り、砂をかける。

「ぶあっ」

ガードされたが一瞬間に合わなかったのか、開いている方の手で右目を押さえている。

その隙を逃さず一直線に駆け抜け、胴を狙う。
だがそれは防がれる。

（なんだ？軽すぎる？）

ただし、踏み込みもひねりもない腕力だけの一撃を

（オチは読めてたんだよ！！）

どうやっても防がれる。

つまり、防がれる事は確定している。

なら、防いだ瞬間攻撃すればいいだけのこと

「つつつ」

ガードした瞬間、一夏の蹴りが腹にめり込む。
重みからしてこっちの方が本命だ。

「ははあっ！！」

肝臓あたりを打ち抜かれ、息苦しさを感じながらもシドは笑う。

喧嘩はやはりこうでないといけない。

互いの全部を出し切って全身全霊でぶつかり合う。

喧嘩は食事と同じくらい満たされる。

命がかかればなおいいが、やっぱり喧嘩はいい。

殺し合いも悪くはないがしがらみとか恨みとか面倒な事が多くてあまりやりたくない。

「それじゃあ喧嘩殺法その4 .

っていつか最後の教えだ」

獣じみた笑みを浮かべながらシドは駆け出す。

一夏は振り下ろされるパイプを左手でつかみ、額めがけて柄を落とす。

シドは柄を掴み、腹めがけて頭突きを決めようとする。

一夏はそれを――顎に対しての膝で返した。

「そうだ…最後の教えは――相手が引くまで前に出続けて!!」

パイプを離して飛び退り、軽く頭を叩いて両腕を大きく広げ、軽く腰を落とす。

「相手が倒れるまで前に出る。だろ？」

「そういうことだ」

にやっと笑って構えを解く。

「ん？」

「これ以上やると止まらなさそうだからよ、今日はここまでだ」

そう言っただけでパイプを取りに行き、戻ってくる。

「一つ言っときたいことがあるんだが」

「なんだ？」

「イチカ……セシリアのはともかく、ホウキのが解らないのはどうかしてるぞ」

「わからないから!!」

擬音ばっかの説明なんてわからないから!!」

一夏の咆哮がグラウンドに響き渡った。

擬音ばかりだった理屈ッぽすぎたり軽く走馬灯が見える実戦の中で一夏は吸収し続けた。

そしてクラス代表戦当日になった

着火5 やりたいことがあるならはつきりしてほしい(前書き)

束って算たちを思ってるのか疑問に思ってくる今日この頃

着火5 やりたいことがあるならはつきりしてほしい

一夏はアリーナの部屋で準備をしていた。

相手は都合がいい事に鈴で、誤解を解くにはいい機会だ。

相手のISは甲龍^{シエンロン}。織斑君の白式と同じ近接型です

画面に映されたISはとげのついた浮遊部分が特徴的な攻撃的なデザイン^デのISだ。

「私やシドさんの時とは勝手が違いますわよ」

「あいつのも近距離型だがよ、獲物使う分俺とは違いぞ」

確かに、遠距離重視のブルーティーズと同じ近距離型でも基本的
に素手で戦うネームレスのどちらとも参考にならない。

というか後半から何でもありになりだしたシドでは参考にならない。
正直参考にしたら大事な何かを失いそうな攻撃ばかりやってきた。

「勝つて来いよ、一夏」

「ああ。勝ってくる」

特訓に付き合ってくれた三人+千冬姉のためにも——自分の為にも
負けるわけには行かない。

たとえ前半三人が擬音ばかりだったり専門用語ばかりだったりで
分からなかったり（特に作者が）、走馬灯が見えるものばかりだ
としてもだ……

一夏はアリーナに入り、空中の鈴と相對する。

「今謝るなら、チョットだけ手加減して上げるわよ？」

そう言つて青龍刀を呼び出す。

「いらねえよ」

どうせ手加減しても8割殺しが7割9分殺しになる程度。それに、手加減するのもされるのも嫌だからそっちの方がいい。

「あんたも一応分かつてるでしょうが、ISの絶対防御は万能じゃないわ。」

上手く加減すれば、相手をなぶり殺しにできる」

實際鈴にはそれだけの技量がある。

正直代表候補生の鈴と自分では力の差がありすぎる。

セシリアを追い詰めれたのは偶然といつてもいいし、シドには遊ばれた感が否めない。だけど

（それがどうした！！勝つて決めただろ？

やるって決めただろ！！

だったら…やるしかないよな！！！！）

刹那、一夏は雪片式型を出し、脇構えの構えを取る。

「いくぞ」

「来なさい」

言うと同時に互いに肉薄する。

「正面から戦っても勝ち目が少ないなら、策を練れ…」

一夏はそれぞれの教えを反芻する。

シドが教えてくれたのは技術というよりも気概の持ち方と立ち回りの基本。

格上とどう渡り合うか、同格相手に有利に運べるか、格下に万全を期す手段。

「相手の獲物が大きいなら構えをコンパクトにして、突きをベースで攻める」

箒が教えてくれたのは相手の獲物に合わせた攻め方と剣術と体術。ISの性能をうまく使えば銃弾にも対応できるらしい（実際一部の国家代表および候補生はできるとの事）。

「瞬間加速は深呼吸をイメージして
急旋回は腰を軸にしてブースは外と内の比率を8：1くらいのイメージで、残りの1は状況にあわせてどっちかに」

セシリアが教えてくれたことはISの動かし方。
専門用語と動く時の角度だけでは分からなかったが、動きを加えると
案外何とかなった。

「相手は規格外でも化け物じゃない」
（相手がなんなのか意識しろ）

だから戦える。

「同じ人間だから弱点もあるし欠点もある」
（相手がどういふものかを認識しろ）

だから勝ち目はある

「俺は皆を守るくらい強くなる」
（どういふ目的で戦うか再確認しろ）

だから戦う。

例えば大事な人と戦うことになっても確かめないといけないことがあるから戦う。

シドに教わった心を強く保つ戦闘前の意思確認（呼吸レベルで行えるようになればいいらしいが、今の一夏はそこまでできない。
後シドは最大目的以外は戦いたいから戦うだけでほとんど口だけ状態だが）をして振り下ろされる寸前に突きを放つ。

「くっ」

「はあっ」

鈴は首を振って避けるが、すかさず一夏は雪片式型を跳ね上げ、鈴の腕をかちあげる。

「！！」

そのまま唐竹割を決めようとするが、何かに弾かれる。
鈴の左手にはいつの間にか逆手に握られた青龍刀があった。

「なかなかやるじゃない。

今度はこっちから行くわよ!!」

二振りの青龍刀で乱舞を仕掛ける鈴に対し、一夏は時計回りで動きながらかつ上に飛んで切り結ぶ。

「逃げるなあっ!!」

追いかけるが攻撃に勢いが無い。

機動力では上を行かれています上に上のほうを狙うせいで体が伸びてしまい、勢いがつかない。

そのうえ利き手側を回り込むように動くから、利き腕の力を十二分に活かせない。

ISがどんなにすぐくても動かすのは結局人間——極論から言っても人体だ。

バッシュイナードシャルキャンセラ

構造上の限界はあるしP.I.Cで慣性を無視してもやはり限界はある。そこを利用すればやれない事はない。

（あっちの方が速い上に利き手の勢いが乗らないから普通に受けられる!!）

ぜったいあのちび女の入れ知恵ね!!）

なんとなく自分と同じ臭いのするファーストと遠距離戦闘型ISを使うセシリアとか言う女ではこういう小技を使うという思考にはいたらない。人間的にまっすぐな一夏も同じだ。

つまり此れは誰かの入れ知恵。

勝つためならあらゆる手段を行使するタイプの人間。

消去法から言ってグラウンドでド派手なチャンバラを繰り広げているあのちび女じゃない。

（手段を選ばない奴つてのがい一番厄介なのよね……
多分衝撃砲の対策も教えてるでしょうが——）

「そんなぐらいで私が負けると思わないでよね!」

鈴が叫ぶとともに不可視の何かが発射され、一夏は吹き飛ぶ。

「……衝撃砲か」

どうせこっちは刀しかないから相手の情報を片っ端から入れておけ
とシドとセシリアに強制学習（シドは喧嘩的な意味でセシリアは情
報戦的な意味で）させられた一夏は何が起こったのか冷静に理解す
る。

だが同時に

（マジで見えない…どうしよ）

結構あせっていた。

クールに言ってみたがかなり強がりだ。

（あいつが言った対策なんて早々できる技もんじゃないし、なんと
かあつ——）

考えてる間に見えない何かに吹き飛ばされる。

「くっ……そっおおお」

一夏は全力で回避行動をとり始めた。

「やっぱここらが限界だったみてえだな」

観客席で大量のハンバーガーを食べながらシドはつぶやく。
格下が格上と渡り合うためには立ち回りを考える必要がある。

上手く動けば勝てないこともない
だが、勝てなければ限界は来る。

来れば実力差がもろに出る。

そうなれば敗北は必死

「まあアレをうまくやれば何とかやれるだろうよ」

「おおおおおおおお」

「はあああああああああ」

一夏と鈴はすさまじい速さで刃を交える。

衝撃砲は全方位に撃てるがこれだけ近ければ自滅の危険も出るから
満足に使えない。

（一瞬で言い！！一瞬でいいから鈴の隙を作れ！！そうすれば勝機がある！！）

「一夏さん、何かを狙ってる感じですね」

スタッフルームで観戦しているセシリアは一夏の眼を見て何かに気づく。

一夏は一瞬のチャンスにすべてをかけている。

そんな目をしていた。

「イグニッション・ブースト
瞬時加速。私が教えた」

「瞬時加速？」

同じく観戦していた篤が聞く。

「一瞬で最大速度を出す技術だ。
使いこなせばあいつでも代表候補生と互角に渡り合える。」

だが、チャンスは一度きりだ」

（相手の隙を見つける）

鈴を飛び越えるように旋回し、背中を切断せんばかりに振り上げるが、前に飛んで避けられる。

（ないなら）

一夏は最大速度で空高く飛び、太陽を背にして突っ込む。

（作り出せ！！）

一夏のほうを肉眼で見た鈴は光で一瞬目がくらむ。
ISが補正をかけるとしても一瞬は隙ができる。

何とか生み出せた隙を生かして最低でも半分は削らないとジリ貧だ。
一夏はバリア無効化を発動し突きを決めようとして

「――」

上空から飛んできたビームを受けて回転しながら地面に叩き落された。

「―― 一夏!!」

「おいおいおいなんだよコリヤ」

シドは驚きながらもネームレスを纏い、上を見る。
そこには――

「妖怪キャラ被りだと!!?」

「何が起こったんだ!!?」

「私に聞かないでくださいませ!!
それよりも一夏さんが――」

箒とセシリアは驚きながらも一夏の心配をする。

「高エネルギーがアリーナのフィールドを突破したようです」
モニターをチェックしていた麻耶があせった風に言う。

「試合中止!!」

生徒は指示に従い避難しろ!!」

千冬言うとともにサイレンが鳴り、観客席の防護シャッターが閉じていく。

「一夏!!大丈夫!!?一夏!!」

「あ…ああ」

ふらつきながら一夏は鈴と同じ高さまで浮く。

「けど右翼と右足がぶっ壊れてるし、変に打ったか知らないけど左腕が何か変だ」

その上絶対防御が発動してエネルギーが大幅に減っている。

「一体なんなのよ…」

「知るかよ…けど言えることは——」

あいつが危険だって事だ。

そう言つて上を見る。

一夏の視線の先には、黒い全身鎧のISがいた。だが2m強はある体、全身に配置されたブースター、センサーがあるのか穴だらけの顔、巨大な両腕から伸びた砲身など、ネームレストはまったく異なる姿だった。

「お前の目的はなんだ」

一夏は体の調子確かめながら問う。

（右翼、右足が大破、左肩の脱臼と一部の筋肉断裂）

ISが送ってくる情報は一夏にとって都合が悪いものばかりだ。

「答えろ!!」

「無駄だイチカ…こういう手合いが答えるとしたら」

ここにはいないはずの声が聞こえてくるとともに、黒炎が黒いISを吹き飛ばす。

「捕まえて拷問した時って相場が決まってるんだよ!!!!」

黒炎を発しながら黒い鎧

シドは叫ぶ

「シド!!なんで…」

「閉まる前に入った」

「そうじゃなくて、フィールド張ってるのに何で入れたんのよ!!」

「この手の奴って全体で共有されてるらしいから、脆くなってる間にいけるかなって思ったら——上手くいった」

「あっそ……とにかく、あいつを止めるから。力貸しなさい。それと一夏は隅っこでおとなしくしてなさい」

「女に任せっぱなしなんてできるか!!」

「あんたがこの中で一番弱いんだから言う事聞きなさい!!」

「ぐっ」

鈴の言葉に反論できず、一夏はうなる。

織斑君、^{ファン}鳳さん、シドさん!!

速くアリーナから撤退してください

「けど、皆が逃げるまでの間は足止めしないと…」

「それに、逃げるのはムリだろうな」

「なんでよ」

「いいかパンダちゃん。

喧嘩でも戦いでも大事なのは自分の逃げ道を確保する事と相手の逃げ道を塞ぐ事だ」

「要するに？」

「経験上俺達は逃げれない可能性のほうが高いって事だよ」

事実アリーナ中の扉はロックされ、フィールドも強力なものに再設定されていて、脱出及び進入不可能状態になっていた。

「俺達ができることは二つ。

「一つ目は外から助けが来るまで耐える」

言いながらも両手から大量の炎を噴出させる。

「けど俺あそういうのは趣味じゃないから、もつかたっぽの方を選ぶ」

「もつかたっぽ？」

「決まってるだろ」

黒いISの目の前に移動し、拳を振るう。

だが黒いISは恐るべき速さで後退する事で回避し、ビームを発射する。

それをシドは炎で作った熱波の壁で軌道を捻じ曲げる。

「こいつをぶっ潰して待つ。だ

とりあえず手足の二三本は覚悟してもらおうかああっ」

炎を放つが黒いISは超速度で回転する事で吹き散らす。

さらに両腕からビームを連射し、シドどころか一夏達も同時に攻撃する。

「ちいつ」

再び熱波の壁を生み出すが、無差別に乱射される光のうちの何本かがシドのほうに向かってくる。

「なめんなあっ」

白い姿に変わり、並のISよりも遅いながらも弾幕をかいくぐり、ビームを一点集中かつ斜面化させたシールドで弾いていく。どう来るか分からない分乱射技は苦手だがダメージを受ける箇所を極限まで小さくすれば案外何とかなる。

「おらぁっ!!」

両手から炎浮き出して一気に真上に飛ぶ。

（上ならその技も意味ねえだろ!!）

一気に黒に戻りながら両手を組み、炎の噴出による加速も加えて脳天めがけて振り下ろす。

黒いISは体を縦に九十度傾け、右フックを放つ。

シドは一泊遅れてガードするが、衝撃を殺しきれず吹き飛ばされる。

「シド!!」

「かまうな!!やれ!!」

シドはひび割れた腕で火炎弾を発射しながら吼える。

一夏と鈴はそれに応える様に攻めるが、回転砲撃で止められる。

「かいくぐれよ!!」

「お前がやれ!!合わせてみるから」

「何度もできるか……どうにも変な感じがするしよ」

「変な感じ？」

互いに時間差で仕掛けながら通信で会話する。

先に突っ込んだシドは避けざまに足をつかまれてそのまま一夏に叩きつけられ、二人まとめて殴り倒される。

至近距離でビームを発射されそうになるが、鈴が青龍刀を連結させて作ったブーメランで妨害し、衝撃砲で二人を吹き飛ばして救助する。

「少しは加減しろ……」

「大怪我するよりはマシでしょ？」

「まあ確かにそうだけどさ……」

アリーナの防護フィールドを貫通するような攻撃をもろに受けければ、一気にエネルギーを削られる。

そうなればISも停止して死ぬ確立が跳ね上がる

一夏も鈴もはその辺にはまったく気づいてないが、大変なことになるだけは判っていた。

「おおああああああああ」

シドは拳と蹴りの連打を仕掛けるが、黒いISはことごとく回避する。

（どうなってるんだ？

いつもなら動きが判るってのに……全然わかんねえ！！）

一夏達の動きは手に取るようにわかるのに黒いISの動きがまったくわからない。

その為か攻撃も防御もややぎこちない。

「面倒だ……」

体中から炎が噴出す。

「装甲を溶かしつくして」

炎が槍の形に凝固していき

「固めてやるよ!!」

「うおっ」

「きゃあああっ」

一夏達を巻き込みかねない勢いで全方位から襲い掛かる。

黒いISは簡単に避けていくが、よく見ると壁際に誘導されている。

「終わりだ」

地面から炎の槍が伸び、手足を貫こうとした瞬間――

「シド!!?」

「あんた!!」

炎が消え、シドは倒れた。

「鈴!!」

「分かってるわよ!!」

鈴は衝撃砲を発射して足止めし、一夏は今できる最大速度でシドを回収する。

受けたダメージや反動で装甲が大分壊れているが、中身は無事だ。

「シド!!何があつた!!」

声をかけるがシドは反応しない。
だが反応できないというよりも

(つめ…たい?)

ISで調べてみたが呼吸も脈拍も正常だ。
なのに冷たい。

まるで……大事何かを根こそぎ消費したみたいに

「くそっ」

一夏はシドを隅っこに運ぶ。

「は…なせ」

「シド！！大丈夫か？」

「何がだ」

「なにがってお前…さっきまで——」

「それよりも、あいつをどうにかするぞ」

そう言つて一夏を突き飛ばして空中で静止しようとするが、ふらついて地面に落ちる。

「あれ？」

立ち上がるが尻餅をつく。

（なんだ？力が…入らない？）

それどころか思考が上手く働かない。
体を調べてみたが支障がでるほど出血していない。

（ま…ずい。

こんなときに攻撃されたら——）

ただでさえ脆いネームレスがアレだけの威力の攻撃を受けたら、下手すれば死ぬ。

仕事の意味でも生命的な意味でもそれだけは、絶対に起こってはいけない。

「くっそお……」

エネルギーはあるが感情が高ぶらない。

感情が高ぶらないと力が出ない。

万事休す。そう思っていたが、黒いISはシドに何のアクションも取らない。

鈴だけを狙っている

そこにはあまりにも露骨な違和感があった。

「イチ力。変じゃないか？」

「……ああ」

一夏も何かに気づいたようだ。

「あのISは動けないお前やまともに戦えないオレじゃなくて、攻撃してる鈴しか狙ってない」

「それどころか、距離をとって様子を見始めたら攻撃を弱めるときてる。」

おかしすぎるだろ」

まともに戦えない奴二名を集中放火すれば鈴は攻勢に出ることもできず一方的に勝てるのにしようとしない。

それに――

「あいつの動き……なんか機械じみてないか？」

言われてみれば衝撃法の防ぎ方、青龍刀への対応の仕方。それらすべてがワンパターンだ。

戦いにおいて自分の型というものがあるがそれでもある程度多様性があり、状況によってぶれがある。

だが黒いISにはそれがない。

その辺から出てきた推論は、荒唐無稽だったが説得力もあった。

「パンダちゃん。チョットこっちに来てくれ」

「はあ？そんなことやってる暇ないでしょ」

「多分、大丈夫だからきてくれ！」

「——何か考えがあるんでしょうね」

「「ある！」「」

鈴はしぶしぶといった感じで警戒しながら飛んでいく。

黒いISは少し攻撃してきたが、すぐにやめて様子を見てくる
まるで攻撃しない奴には攻撃ができないような感じで。

「……やっぱりな」

「ああ」

それを見て二人は相手の正体を確信した。

「それで、一体何よ」

シドは核心に近づくための言葉を口にする。

「あいつ…なんでこっちを攻撃してこない？」

「そう言われてみれば…なんで？」

「もしかしたらだけどさ、鈴。

あいつって、攻撃してこない奴には『攻撃できないようにできてる』
としたら、どうする」

「何が言いたいなの？」

「もしかしたら、あいつは無人機かもしれねえって事だ」

人が乗っていない無人機ならプログラム通りにしか行動しない。
機械でできた無人機なら自分が判らないのは当然だ。

「そんなのありえないわ！！ISは人間が乗らないと動かないように
できてる」

鈴は知識で否定するが

「例外（男）が動かせるんだ。無人機くらいいてもおかしくないだ
ろ」

シドは過去の事実で否定する。

「……仮に無人機だとして、どうするの？

全開で後数分しか動けないISが1、半壊状態のISが1。
極めつけにはまともに動けない奴が1。

これでどうやって動くの？」

「種がわかれば対処は簡単だ。」

普通なら待てばいいんだろうが……」

シドはふらつきながらも自力で立ち上がる。

「そういうのは趣味じゃねえし、あいつが無人類なら絶対に許しちやおけねえ」

「「なんでだ（なんでよ）」」

「俺は喧嘩が好きだ」

内側から何かが湧き上がってくる。
それが何か俺は理解できる。

「喧嘩つっても俺の住んでた場所柄なんでもありだ。
素手だろうがナイフだろうが銃だろうがフクロだろうが何でもな。
正直何度も死に掛けたし殺しかけた（実際は大分殺してるが）。
けどなあ」

喧嘩と殺し合い。

その中に俺の人生の大半が詰まっている。
だからこそ妙な拘りがある

「俺には教養とかそういうのはねえが拘り位はある。
喧嘩つてのは本人同士でやるから意味がある。
自分でぶつかるからこそ価値がある」

拘りがあるからこそ許せないことがある

「だからよ……自分が出てこないで遠くで呑気に眺めてる……」

指を黒いISに向けて指す。

「こいつを作った奴。」

お前を絶対に表に引きずり出して殴ってやる」

明確な敵意を向けてシドは宣言する。

自分で戦わないで他人任せにする奴を俺は絶対に許さない。と

「だからよ……そいつに価値はねえって教えてやるよ」

自分で戦うからこそ戦いは価値がある。

自分で戦うからこそ戦いを感じれる。

自分で動くから生きてると実感できる

「人間が動かさない鉄くずに価値がないってよお!!」

だから全力で憎悪する。

憎悪と怒りを糧にするかのようにネームレスに炎が燈る。
今までよりも黒い黒炎が立ち昇る。

「俺も…嫌だな」

一夏はそう言ってシドの隣に立つ。

「俺ってさ、昔剣道少年だったんだ」

言いながら強引に脱臼した肩を填め直す。

「それで？」

「つつ………稽古して、いろんな奴と試合して、そこそ良い所まで行ったりした。

自分が強くなっただって実感できた。けどさ」

ブースターの全機能を左翼のみに、動きが悪い左腕の力を右腕に回すように再設定していく。

「そういつのつて、相手が人間だから実感できたんだと思う。同じくらいかそれ以上に努力した相手と戦ったから感じたんだと思う。

才能がある奴に勝ったら努力して超えたって実感できたんだおもうんだけど、機械にはそれがない」

最初から強いようにできていて最初からそういう風になるように決まっている奴をオレは許したくない。

許したらオレの過去を否定することになるから。

許したら今も努力してる人たちを否定することになるから。

許したら千冬姉の過去を否定することになるから。

「行くぞ」

「おう」

「待ちなさいよ!」

行こうとする二人を鈴が止める。

「友情深め合ってる所悪いけど、勝算はあるの?」

「ある」

シドは断言する。

「零落白夜を当ててシールドを消して」

「あいつが止めを刺す」

「あいつ？」

シドがアリーナの一角を顎でしゃくつたのを見て鈴はセンサーを使
って見る。

すると、自分や黒いISの攻撃でできたアリーナの残骸が不自然に
つぶれた場所を発見する。

「なるほどね」

私の甲龍はバランスを重視してる分、尖ったところがない。

早い話爆発力がないから何かしら上を行かれると大分ヤバイ。

この場合居るのは相手を一撃で黙らせる火力。

だけど甲龍にはそれがない。

あるとしたら一夏とこいつと――

「とはいえ、確実に当てるなら作戦が要るわよ」

正直自分が手柄を立てて一夏にいい所を見せたいが、そうも言っ
てられないので自重する

「とりあえず俺は動きを封じる」

「オレが合図をしたら、鈴は衝撃砲を全力で撃ってくれ」

「いいけど…効かないわよ？」

何発か当てることができたが、どれも有効打には至っていない。

ペース的に普通ならエネルギー切れになっててもいいのにならないことを考えたら二人の言葉に真実味が出てくる。

人間が乗っていないならどれだけ無茶な改造をしてもいいのだから。

「大丈夫だ。いく——」

「一夏——」

アリーナに声が響く。

見てみると…なぜか箒がいた

「あの馬鹿女——」

（ISなしでくんじゃねえよこんなところ——！）

人間なら殺さないように加減ができるだが

「男なら——男ならそんな奴にてこずってどうする」

「—— 逃げろ箒——」

箒に顔を向けた黒いISにそんなものはない。

（間に合わない——！）

「やるぞ！」

一夏の決断は速かった。

「燃え上がれえええええええええ！」

シドは最大火力で黒いISを飲み込む。

「ちっ……消し飛ばせるほど力はでねえか」

さつきまでよりは大分ましたが、動きは鈍いし物理的に消せるほど火力は出せそうにない。

「十分だ」

奴の動きを封じる為には。

「鈴！！」

「ひよひよかい！」

鈴は衝撃砲をうとうとするが、一夏が前に割り込む。

「ちよ！ どういうつもりよ」

「とにかく撃て!!」

「どうなっても知らないんだから!!」

そう言って発射された空気の弾丸は、白式の背中に直撃する。

突然だがここで、瞬時加速について改めて説明しよう。

瞬時加速とはISの後部スラスタ翼からエネルギーを放出、その内部に一度取り込み、圧縮して放出し、その際に得られる慣性エネルギーをして爆発的に加速する。

そして使用するエネルギーは、外部のエネルギーを使用してもいい。

「おおおおおおお」

強烈な衝撃を気合で押しのけ、エネルギーをためる。

——ブースター充填率100%——

——エネルギー充填率80% 零落白夜使用可能——

「手柄はくれてやる」

言うと同時に炎を切る。

同時に失われていた酸素が一気に戻り、爆発レベルで荒れ狂う。機械仕掛けの黒いISはこの程度の誤差はスグに修正する。

それでも

「動きを止めるのには十分だろ!!」

「い　く　ぞおっ!!」

画面に表示されたと同時に突っ込むが、片翼しかないため思うように加速できない。

空気の逆流に体に乗せてもまだ足りない
それどころかさっきまで負担をかけていたツケが回ってきたのか、
レッドアラートまで鳴り始めた。

（あと一押し…なんでも良いから一押しが――）

瞬間、一夏の背中に瓦礫が直撃した。

後ろを見てみると、ISスーツを着たシドが柱の近くに立っていた。
それによってわずかだが必要分の加速は得ることができ、黒いIS
の拳の間に合いに入る。

（俺は…俺が関わった人全てを）

飛んできた左拳を腕ごと切断するが、両手持ちの刀を片手同然で振ったのに加え、肩の痛みですっぱ抜けてしまう。

黒いISは一夏を叩き落そうと右拳を振り下ろす

（守る!!）

一夏はそれめがけて拳を叩きつける。

白式の指装甲は微塵に砕け、そのまま地面に落ちていく。

だが、黒いISの拳も砕け、フレーム一部もゆがんでいた。

（なまじ頑丈な分……大分効くだろ）

ISはPICという特殊な機能で慣性を見捨てる事ができる。だがそれでも大質量かつかなりの重量なのは変わらない。そこめがけてあわせれば——粉碎する事もできる。

（左はしばらくつかえそうにないな……）

顔の横に落ちた雪片式型を見ながら一夏は笑いながら考える。黒いISが自分を撃とうとしているのだ。

「とどめは任せたぞ……」

オレは必要なことはやった。
あとは——

「セシリア!!」

信頼できる人間に任せるだけだ。

「分かっていますわ!!」

瞬間——ISのステルス機能を使って身を潜めていたセシリアは、ブルーティアーズのビットとライフルで黒いISを蜂の巣にした。

「見たか無人機……これが——」

「人間様の力だ」

「大丈夫ですか皆さん」

「ああ。お前ならやってくれると思ってた」

「と…当然ですわ。皆様は？」

「なんとかね……さっさと帰ってご飯食べたいわ」

「俺も飯にしたいが……用事ができちまった」

「用事？」

「こいつの再調整をたのまねえといけねえ。

動力系は一応見れるが、肝心なところはテンデだからよ」

（それに、アレについて聴きなおさねえとな）

「オレは——」

警告音が鳴り、白式が黒いISの再起動を報告する。

（マジかよ!!）

全身穴だらけの上にライフルで腹に風穴が開いたのに動くあたり、無人機様様だ。

自分に向けて狙いをつけているのを見た瞬間一夏は、雪片弑型をつかんで突っ込んで行った。

「って事があつたんだが、どう思う」

夕方、保健室のベッドの上で隣のコントに聞き耳を立てながらシドはISのコアネットワークを応用した通信システムを使って会話を
する。

このシステムはISの高い隠蔽性に加えDr・特性の暗号機を経由
しているから、少なくとも一人を除いて外の人間が解読できない。

まあ十中八九彼女だろうの〜

間延びした老人の声が聞こえてくる。

「やっぱりお前も」

相手が無人機なのは倒れた体を少し調べて分かった。

乏しい情報と知識を組み合わせて自分が出した結論からして、アレは

「タバネ・シノノノが作ったって思うか」

まあお互い消去法で至った結論がそれなだけだかの〜

まず一点目。

ISのコアは世界中あわせて467しかない。

これは量産不可能な現時点における絶対数だ。

加えて国際条約で取引が禁止されているため『表向き』は数が変動
しない。

何らかの要因で変動した数を金に対価に戻すのがシドの本来の仕事

だが、この辺はそのうちになるだろう

次に二点目。

前述の通り数が変動しない——仮に裏で変動したとして、そんな貴重なものをIS学院という厄介な人間が多数いる所に強襲させるメリットがなく、同様の理由で秘密裏なり公的なりで運用すればいい無人機を行かせるメリットもない。

最後に三点目。

コアの解析は調べた範囲では自分達が一番進んでいるが、肝心なところには至っていない。

つまり、前述の通り量産不可能といっても過言ではない。

この三点を総合して出た結論は

『無人機を作れる技術力を持ち、IS学院を強襲する馬鹿で、貴重なコアを湯水のように使える人間』ということになる。
そこから至った結論が篠ノ之束。

ISコアの発明者にして今の世界を生み出した張本人だ。

あの人は自分以外はどうでも良いらしいからの……
織斑姉弟と妹は……例外じゃが

「なるほど……ようするに友達が居ないから勝手に動いてくれるお人形を作ったと」

そういう事だろうの〜

シドと老人は少し笑う。

束ではなく自分達の言ったことのくだらなさに。

お前が言っつたもう一つの件じゃが――

そう。無人機よりもそっちのほうが問題だ。

いきなり倒れるなんて事があつたら、日常生活にも肝心な時にも支障が出る。

原因を見つけておかないと不安で仕方がない。

全然分からん!!

「っておい!!」

「シド!!?」

「起きてたのか?」

「眠っていたんではありませんの!!?」

今の声で全員気付く。

「わりいわりい…お前らのコントを聞いてたら起き辛くてな」

「コントって……俺達は別に何も」

「お前ら。イチ力は肩やら腕やらやってるんだ、加減しないと一生もんだぞ」

軽く釘を刺してシドは出て行く。
暫く寝たお陰で大分楽になっていた。

さっきの続きじゃが、アレは設計図消えちもつたからネームレスに組み込んだ試作品以外ないんだよ――
分かるのは強烈な感情を機体の力に変えることくらいだしの――

「何で最初に調べねえんだよ」

試験運転する前にお前が勝手に使ったんだろ――。
お陰でファッティングするわお前のほうが協力してくれた奴全員よりもいい数字たたき出すわけで
面倒だからそのまま続投させたんだがの――

「あんなところに住んでる人間を使う時点でむちゃくちゃだろ、改めて思ったが」

うちの面子はもつとひどいのがいるから問題ありませ――ん

軽い声を聞いてシドはため息を吐く。

「とりあえず、ネームレスは大分やられたから調べるついでに来い。
隊長のコネならねじ込むくらいはできるだろ」

予定がだいぶつまつとるから七月頭くらいになるの――
それと、フランスで面白い動きがあったぞい

「フランス？チーズとワインが旨かった記憶があるな」

そうそこ。そのな――

老人は面白そうな風に言う。

なんだ、皆考えてることは同じかといわんばかりに

デュノアって会社がうちと同じ事を考えてるっばいぞ

着火5 やりたいことがあるならはつきりしてほしい（後書き）

一夏が無人機を嫌うのは独自解釈気味ですが、曲がりなりにもスポーツ少年だったからありかなと思ってやってみました

あと一夏が強くなつてるといふより鈴の実力を発揮できないように動いてるだけなので、実際の力関係はあまり変わりません

間話（前書き）

今回の話は2巻開始前夜といった感じです

間話

とある演習場で二体の黒いISが戦っていた。

だが二体の威容はまったく異なる。

片方は背中の中浮遊部分に巨大な大砲をつけた、使用者である銀髪の少女の姿が見えるある意味普通のものだ。

そしてもう片方は人間サイズの大きさしかない鋭角な全身鎧という異様な物だった。

「これで何回目だよまったく……県下はともかく恨み言で向かってこられるのは嫌なんだけどな」

全身鎧の方から少女の声がする。

その声からはやる気というものが感じられない。

「言ったはずだ。私は貴様のような適当な奴を認めるわけにはいかないと!!」

折りたたまれた大砲が展開し、発射されるが、右手に触れた瞬間溶かされる。

「うちは仕事さえやりやいいがモットーなんでよ、大目に見ちゃくれないか？」

「訓練をサボる軍人など認めるわけがないだろ!!」

叫びながら少女は両手から光の刃を出して切りかかる。

「俺は一応軍人で代表候補生だがよ……やってる理由なんて金がい

いから以外にねえよ！！」

両手に固まった炎を纏わせ、一瞬で弾く。

「それに言っちゃなんだがやる事は勝手にやってるから問題ねえんだよ」

殴り飛ばそうとするが、見えない何かにつかまれたように固まる。

「どちらにしろ私は認めん！！あの男の次に認めん！！」

零距离で大砲をぶちかまそうとするが、腹から発射された炎にあおられて離脱する。

「あの男って…誰だ？」

「教官の弟にして教官の二連覇を邪魔した男だ。

故に私は奴を許す気はない！！

規律を完全無視する貴様以上にな！！！！」

それからひたすら言葉と武器の応酬が続き全身鎧のISが勝った。

「くそっ！！なぜこつも勝てん！！」

「俺より弱いからだろ」

「貴様のような訓練に耐えれないような脆弱者に負けること自体許されんのだ！！」

「今のは力チンと来たぞおい。

俺は訓練が嫌だからやらないんじゃないかねえ。
訓練やる必要ねえからやらねえんだよ」

「だからそういうのが私は嫌だといっているんだ!!」

地団太を踏む少女を遠めで同僚らしき人達が生暖かい眼で見ている。

「うぬぼれてるわけじゃなくてよ、体力も筋力も十分あるんだよ。
基本殲滅だけしかできないけど」

「それくらい私が教えてやる……」

「なら俺は代わりに夜の遊びお教えてやる。
まずはバーだ」

「だから私はそういうのに興味はないと何度も言っているだろうが
!!!!」

ベッドで寝ていた少女は跳ね起きる。

荒い息を吐いて、夢を見ていたと気付く。

「久々に奴の顔を見た……」

苛立ちながら上着をパ羽織って窓を開ける。
奴を思い出すと苛立って眠れる気がしない。
力はあるがそれに対する責任感は皆無だが、自分のルールだけには

忠実な苛立ちとある種の尊敬を同時にかんじられる少女。

「明日からIS学院だったな……」

少女は学園にいる二人の人間に思いをはせる。

一人には尊敬。

もう一人には嫌悪の思いを。

長い金髪の少年はジュースを飲みながらため息をつく。

正直自分を利用するだけのあの人に従う義理はない。

だけど逆らう気にもなれない。

正直自分が悪党か正義の味方だったらどれだけ楽だったか。

悪党なら喜んでやれたし、正義の味方なら全力で何とかするために動いただろう。

「まあ……やるだけやろう」

正直どうなったってかまわない。

僕には選択権はないんだから。

翌日 まだ夜が開け切らない校舎でシドは体の調子確かめるように走っていた、

「よっし…十分だな」

壁面を垂直に

正しくは微妙な出っ張りやパイプに手足を引っ掛けて登っていると

いったほうが良いが、走っているレベルの無駄のなさだった。

「もうじきトーナメントってのがあらしいが……面倒事しかねえよ」

似た穴の貉に頑固な顔見知りと同時にやってくる。

正直面倒臭い事この上ない。

まあやる事は変わらないから問題はないが

「イチカと教師以外眼中にないラウのほうは良いが……問題はデュノアだな……」

境遇上やる気はないだろうが、立場上やるしかないからばれるまでは一応続けるだろう。

（細かい仕事はあっちの方が向いてるだろうから協力していくくらい恩恵もらうのが一番良いんだが……）

困った事に白式に関してはデュノア社と隊長の目的がちよっと違う。デュノア社は第三世代への足がかりとして白式が欲しいが、隊長は男でも使えるISを作る手がかりを求めている。

対応を誤れば敵対する事かもしれない

戦闘になっても負けはないだろうが場所の都合で生かしておかないといけないし、ただでさえ無人機の件で教師達に目をつけられてる状態を悪化させたくねえ

「ああ……だりい」

いつもならさっさと消すなり楔をぶち込むなり出来るんだが、今回の仕事はそうも言ってられねえ。

あいつの様子を見て対応を考えねえとだめだ。
正直面倒臭い。

「けどまあイチカも気にいらねえが……」

デュノアはそれ以上に気にくわねえ。
ことが起こった時にでも言っておこう

そう決めたシドはパイプをつかんで一気に滑り降り、ISを部分展開しながら壁を蹴って隣の校舎の階段まで飛んで行き、着地する。

「まあ、なるようにはなるか……」

結局行き当たりばったりのシドだった。

登場人物紹介1（前書き）

そろそろやっておこうかなと思ったので出します。
シドおよびネームレスの解説です

登場人物紹介1

シド

年齢：本人は覚えてない

CV：現在考え中

髪の色：赤

髪型：痛みに痛んだショートヘア（首が半分近く見えるくらい）

瞳：濁った赤銅

目付き：かなり釣り目

肌：褐色

身長：145cm

体重：48kg

体型：かなり細身（超筋肉質。いわゆる細マッチョ）

国籍：インド

好きなもの：新鮮な肉野菜、戦闘（特に喧嘩）

嫌いなもの：芯のない人間、喧嘩の邪魔をする奴、諦める奴、腐っ

た食べ物（腹は壊さない）、傷つけるのが好きな奴

使用IS：ネームレス

概要

上に一夏か白式の確保、および束の捕獲を言われてやってきた少女。一応軍人で代表候補生。

訓練や講習をサボりまくっていて知識はほとんどない（束の事も知らないくらい）が、単純な力ならIS学院内でも最強クラスを誇る。仕事を任された理由は「見た目がそれっぽい事」と「頭を使うことを覚えさせるため」

身体能力はアホみたいに高い

結構独特なネーミングセンスがある。

あとネームレスに慣れすぎたせいで普通のISをつけると、無様なことになる

性格

自己中心的で損得でしか動かない（一夏達に付き合うのも鍛えるのも喧嘩のしがいが無い事得感度を上げる為）が、案外ノリがいい。

上述の通り軍人兼代表候補生だが、失格レベルで礼儀も頭も悪いく所属部隊がかなり特殊なものと代表候補生になったさいの条件で後者をギリギリ維持している。

戦闘。特に喧嘩が好きで、火付きは遅いが一度点くと終わるか横槍が入るまでとまらなくなる。

命がかかればなお嬉しいが面倒ごとはゴメンだから殺し合いは隙じゃない。

喧嘩は本人同士というこだわりがあるため、ゴーレムおよび作った束が嫌い（目下の目標は束を殴り倒す）

戦闘スタイル

カウンター主体だが、実際は超暴力的な攻め方が得意。相手の動きは気配と初動で大体わかるため基本的に攻撃も防御も効かない。

生身とはいえガードごと一夏を蹴り飛ばせるほどの力を持つ上、小回りも効くから性質が悪い。

ただし気配も微妙な予備動作もないゴーレム、どれがくるか判らないブルーティアーズや銀の鐘、動きのタイミングを隠せる楯無等は苦手というか苦戦する。

逆に甲龍やシュヴァルツェア・レーゲンのような本体のすぐ近くにある武器なら読める。

他作品で伝えるなら劣化水の心。

過去

今のところは家族がいないというだけに分かっている。

ヒロインの大半の家庭事情が濃い原作に負けなくらい濃いので御安心を

ネームレス

概要

人間サイズの全身鎧で、既存のISと設計が全く違うため世代を表記するなら新世代が一番近い（それでもシドが居る部隊のほかのISではおとなしい方）。

あるシステムの試験機を改造した物で、あらゆる機能を削り落として攻撃にまわしている。

その為攻撃力と機動力なら第4世代組を軽く超える（本気で打てば

全打撃が絶対防御発動レベル）が、燃費の悪さも軽く超える。

一つの武器にスロットを使っているが、スロットの一つにIS用武装以外を色々入れているため雪片式型よりも攻撃力はない。

マスク部分は酸素マスクにもなっている

上述のようにシドは色々知らないため、中身が大変なことになっている。

機体カラーは白↑↓メタリックブラック

武装

暴君の炎 タイラント・フレア

ネームレス唯一にして最大の武器。所謂火炎放射器だが発射口はネームレスの『全身』。

その為同じ全包围攻撃可能でも龍砲と違って近距離での取り回しが楽な上に高速移動中に変態軌道が出来る。地面をマグマ化させるほどの温度を一瞬で出す事が可能で、その気になれば相手のISCコア以外を消す事が可能。

空気をゆがめてBT兵器を、超高熱で実弾を無効化できる。

そんな物を出せば無論本体がただではすまないのでシールドは耐熱性を重視している。

その為相手の攻撃が当ると危険。

シドの感情に合わせて色や威力が変わる。

炎武 えんぶ

PICの応用で炎を固める事が出来る。

応用性は抜群。

???

ネームレスの肝。

シドの感情を機体性能に+する。

作った人間もよくわかっていない。

制御装置の兜を取ると発動しない

セーブモード

攻撃力と機動力を防御力にまわした形態。

防御力は並のISレベルにまで上がるが、機動力と攻撃力は並以下になる

さらにこの状態の間機体の色は白に変わる。

様子見や弾幕を張ってくる相手に対してよく使う。

着火6 眼帯と貴公子 トラブルを添えて（前書き）

ラウラの眼帯はシドがあげたやつです

着火6 眼帯と貴公子 トラブルを添えて

「イチカ。何がどうなっている」

「さあ」

夜が明けると、どういいうわけかトーナメントに優勝したら一夏と付き合える事になっていた。

その上どういいうわけかシドが候補筆頭になっていた。

「お前も大変だな。周りから面倒事が襲い掛かってきてよ」

「ああ。なるべく平穩無事に過ごしたいんだけどな」

IS学院に入学した時点で平穩からは程遠い気がするけど、気にしたら負けだ。

そして時が経ってホームルームになる。

「今日は皆さんに転校生を紹介します。
入ってきてください」

真耶にいわれて入ってきたのは、少女と、少年だった。

少年は金髪を束ねた、貴公子という言葉が似合う、一夏とはまったく違うタイプ。

少女は氷のような雰囲気を持った銀のロングヘアの、シドよりは大きい少女だった。

左目に付けた刺繍が施された眼帯が印象的だ。

「シャルル・デュノアです。フランスから着ました。よろしく願います」

なん…だと!!？

「男…だと？」

ありえねえ。

例外中の例外みたいな人間が連続で出てくるなんて…
けどなんか…変だ

驚くべきことなのに知った事か!!といわんばかりに女子どもは黄色い声を上げる。

「来た!!男その2来た!!」

「これで勝つる!!」

「地球に生まれてよかったあ~~~~」

「静かにしろ貴様ら!!」

教師に静かにしろといわれて一瞬でするあたりノリがいいと思う。

「はい。ボクと同じ境遇の人が『二人』も居るなんて、驚きです」

二人？

彼の視線がシドのほうを向いているような――

「そいつは女だぞ」

銀髪の少女が注意する。

「そうなの？ごめんなさい」

「かまわねえよ。昔からよく言われる。

それと、久しぶりだな。ラウ

大分ノリがよくなったじゃねえか」

昔のお前なら無視してたのにな。ちよっぴり嬉しいぜ

「貴様のような濃い人間と居れば嫌でも染まる。
それだけだ」

そう言って少女は皆のほうを向く。

「ラウラ・ボーデビツヒだ。
以上」

シド以上に簡潔な説明をして、一夏の前に立つ。

「最初に言っておく」

剣呑な目で一夏を睨み付け 体重を乗せて思いつきり殴る。

一夏は机から転げ落ち、呆然としながら見上げる。

「私は貴様の存在を認めない。絶対にだ！！」

そう言っただけで開いている席につき、腕組みして目を瞑る。

そんなこんなで授業に行くことになった。

仮にも弟が殴られたのにスルーするあたり千冬も結構アレな人間だ。

「じゃあ俺はお先に」

「おう」

そう言って服を脱いで下に着込んだISスーツを露にしたシドは窓から飛び降りる

「ええっ！！？」

シャルルは驚いているがラウラも含めて他の人達はあまり気にしていない。

「シド！」

「何だ教師？」

きれいに受身を取って着地したシドは千冬の声に振り向く。

「来週から窓からの出入りは禁止になった。忘れるな」

「りよゝゝかい」

そう言っただけでアリーナに走っていく。

「あの人って…いつもあなの？」

「おおむね…けど色んな奴の相談に乗ったりしてるからわりといい

やつだ」

「へ〜〜」

「変わりにいろいろもらってるがな」

金とか食べ物とか古着とか。

まあちゃんと力になってるから何もいえないけど。

「へ〜〜」

思考を放棄したような顔をしてるけど何も言うな。
友達やってる俺も、たまに着いていけないから。

「ねえ一夏……」

「なんだ？」

オレとシャルルは

「これもいつものことなの？」

「最近はなかったけど、シャルルが来て再発したんだと思う」

女豹の群れから全力疾走で逃げていた。

飽きてきたのかここ最近はなかったが、新たにやって来た男という
わけで再び火が入ったようだ。

（逃げ場はない……）

「更衣室までの位置はあだから…」

つかまったら遅刻確定〓千冬姉の処罰決定〓死亡決定〓何が何でも逃げる！！

オレの灰色の脳細胞は即座に結論を下し、シャルルを抱える。

「ふええええ　一夏！！？」

「最終手段！！」

（シド直伝！！）

一夏はジャンプ

（一瞬だけ部分展開！！）

する瞬間に足首から下だけISを展開して女子の壁の向こう側に飛ぶ。

部分展開は所持者の反射速度依存（セシリア達代表候補生クラスのはマジで速い）で、初心者の一夏では一瞬だけ出して引っ込めるレベルのことはできないはずだが、死ぬんじゃないかねコレと思うような実戦と特訓のお陰で大分早く使えるようになった。

「ああんまって〜」

「せめて写真一枚とらせて〜」

「来月本出すから被写体になって〜」

「被写体って…なんのдар？」

「分からん。というか分かりたくない」

不穏な言葉を放つ女子達から全力で逃げるために、一夏は走り続けた。

シャルルをお姫様抱っこしながら。

「おいDriver」

先にアリーナで待っていたシドは秘匿回線を開いて隊長に連絡を入れる。

「なんじゃくく？これからAPICの起動試験じゃつちゅうのによくく」

「デウノアが男なのを何で教えなかった？
特に後ろ盾のない人間の方が楽だろ」

シャルルは織斑千冬や篠ノ之束のような存在とかかわりがない一生徒にすぎない。

存在自体認識しない束はおいておいて、ただの生徒と弟では千冬の火付き具合も大分違う。

同じジョーカー切りでもモチベーションが違えば対応できないこともない。

というかあの時言ってくれば宿泊先を突き止めてさうつことができた。

偽装工作大破壊工作大事故のハッピーセットつきでだ。

ほえ？おつかしいな〜

おまえはどこのカードキャプターだ
で、おかしいって何がだ。

この前ミリーがデュノア社長の血縁関係を洗ったんじゃが――

洗ってどうした？

あそこに「博士」速く来てくれないと試験始められません！」

おおすまん。

わるいが行くわ

おいチョット待て！！

肝心な所なしかい！！

まあ教師達がやって来たから無理かもしれなかったがそれでも言う
てくれよオイ！！

その頃

一夏は一息つきながら更衣室のベンチに座る

「ふ〜」

正直かなり疲れた

あのままずっとシャルルをお姫様抱っこしながら走り続けて腕がパ
ンパンだ。

不思議なことにシャルルは顔が真っ赤だし、風邪かな？

「何とか撒けたな」

「……うん。」

でもごめんね、いきなり迷惑かけちゃって」

「いって。それよりも助かったよ。」

学園に男一人つてつらいからな」

「そうなの？」

「まあな」

男なんて教員とか込みで片手で数えるくらいしか居ないし、男子生徒はオレ一人だからなんだかんだで肩身が狭いし。

なにより男子トイレが少ししかないからピンチのときはマジでヤバイし。

「二人で頑張っていこう。」

オレは織斑一夏。

一夏って呼んでくれ」

「うん。ボクのことはシャルルでいいよ」

「ああ…やばいな」

時計を見ると40分を回っている。

「急いで着替えるぞ！」

そう言っで一夏は服を脱ぐ。

「うわっ」

シャルルは素っ頓狂な声を上げて後ろを向く。
しかもなぜか顔が赤い。

「どうした？」

「な なんでもないよ。
できれば、後ろ向いてて欲しいんだけど」

「？」

まあじろじろ見る気もないしな」

そう言つて上着を脱ぎ、ズボンのベルトをはずす。

「早くしないと時間につるさい先生に怒られ……」

シャルルはもう着替え終わっていた。

「はやいな、着替えるの」

「そんなことないよ、普通だよ、普通」

「なんかコツがあるなら教えてくれ。
いろいろ引つかかって着替えにくいんだよな」

「ひっつかか!!?」
「色々?!」

シャルルはやっぱり変なりアクションをする。

「そのスーツ、着易そうだな」

一夏はシャルルのISスーツを見ながら言う。

シャルルのISスーツは一夏のそれよりも柔軟性が高そうな感じた。

「デュノア社製のオリジナルだよ」

「デュノア？」

おまえの苗字もデュノアだよな」

「父が社長をしてるんだ。

一応フランスで一番大きなIS関係の企業…かな」

「社長の息子か…なんか納得がいった」

「なつとく？なにが？」

小首をかしげるしぐさに、一夏は不覚にもどきりとしてしまう。

「なんていうかさ、立ち振る舞いに気品があるっていうか、いいところの育ちつてのが判るっていうか…チョットうらやましいな」

それにシャルルは何も返さず、どこか悲しそうな表情で俯くだけだった。

「今日からISの実習を行う」

「はい！」

「ダルイ」

正直ISの講習よりも普通の勉強が普通の運動の方がマシだ。
分かってることもつかいやるほど面倒なことなんてない。

「鳳、オルコット」

「専用機持ちならすぐに始められるだろう。
前出る」

「メンドイな」なんで私が…」

「こういうのは見世物みたいで、気が進みませんわね」

どうも二人ともやる気がないようだ。

「お前ら、少しはやる気を出せ。あいつにいい格好を見せたいだろ？」

千冬がちらりと一夏を見る。

その瞬間恋する乙女二名が覚醒する。

「やはりここはイギリス代表候補生。
セシリア・オルコットの出番ですわね」

「実力の違いを見せるときが来たようね！
専用機持ちのね！！」

いきなりやる気を出し始めた。

（（何を言っ たんだ千冬姉）教師）千冬先生）

「きょうし〜二つ質問」

「シドか。言ってみろ」

「俺も専用機持ちなんです、何でもやらせてくれないんでしょうか」

せめて体を動かさせてくれ。

気が楽になる。

「お前のISは根本的な部分から通常のそれとは異なる。

よって手本を見せるのにはむいていない為基本的にお前の出番はな
い」

「ぐっ」

「で、もう一つの質問はなんだ？」

「まーや（山田先生）は？」

「お前は綽^{それ}名癖を早く止める事だ。山田先生は――」

その時、風切り音が上から聞こえてきた。

「イチカ〜〜白式展開して上見て構えとけ」

「ん？ああ」

一夏はシドの言うことを聞いて展開する。

こういつときのシドの忠告は大概当たるからだ。

「きゃあああああああああ」

上空から何かが飛来する。

大きな眼鏡。

とろそうな眼。

豊満な体。

そう　ネイビーカラーのISをつけた我らが山田先生がだ。

「どいてくださああああああい！！」

それは砲弾のような速さで一夏めがけて飛んでくる。

「うおおおおッ！！」

粉塵で視界が覆われる中、一夏は踏ん張り、真耶を受け止める。

「ふむむむむ（訳：な、なんだ？）」

わけが分からず状況確認しようと顔を左右に振る。

だが視界が開くことはない。

分かっているのは妙にやわらかいものに顔が埋まっていることだけだ。

「織斑君…受け止めてくれたのは嬉しいんですが、離してくれないでしょうか？」

「むが（はい）？」

顔を後ろにやってみると、そこには黒いマシユマロが……！
そう！

一夏は真耶を受け止めたのはいいが、そのままマシユマロに顔を埋めていた。

「こまります、でもこのまま行けば織斑先生が義理のお姉さんに。それはそれでいいような――」

「なにいつて ハッ」

一夏は殺気を感じて真耶を突き飛ばし、反動で離れると、自分の頭が会った場所を光が通過した。

「おほほほ。残念……はずしてしまいましたわ」

光が飛んできたほうを見ると、額に血管を浮かせたセシリアがライフルを構えている。

すいません…髪の毛チョット焼けたんですが

「iiiiiiiiiiiiiiiiちかああああああああああ」

同じく血管を浮かせた鈴が連結させた青龍刀『蒼天牙月』を投擲してくる。

俺はしゃがんでかわすが、あの状態の蒼天牙月はブーメランかフリスビーみたいに帰ってくる事を思い出す。

「やばっ！」

急いで雪片式型を出そうとするが、二発の銃声とともに蒼天牙月が地面に突き刺さる。

「え？」

正直驚いた。

銃弾で軌道を変えたことには驚いたけど、山田先生がそれを行ったのにはもっと驚いた。

「だいじょうぶですか？ 織斑君」

一瞬だけ目が鋭みを帯びていたのは、絶対気のせいじゃないと思う。なんかシドがうずうずしてるけど無視。

「山田先生は元代表候補だ。アレくらい造作もない」

「昔のことですよ。それに、候補生止まりでしたし」

そうはいいいながらもかなり嬉しそうだ。

「さあ小娘ども、さっさとはじめろ」

「さすがにそれは…」

「安心しろ。今のお前達ではスグ負ける」

千冬の言葉を聞いて二人ともむっとする。

「それでは はじめ！」

千冬の合図で、三人は上空に浮上した。

「デュノア。山田先生の使っているISについて説明してみる」

「はい」

上空の戦闘を見ながらシャルルは説明を始める。
要約するところだ

- ・名前はラファール・リヴァイブ
- ・デュノア社IS製で第二世代の最後発ながらも初期の第三世代相当の性能がある。
- ・安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴
- ・世界第3位のシェアを持ち、7ヶ国でライセンス生産、12ヶ国で正式採用されている。
- ・特筆すべきは操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばない事と多様性役割切り替えを両立している。

ようするに使いこなせなければ器用貧乏止まりだが、使いこなせば隙がないISだ。

その反面汎用性が高すぎるゆえに甲龍と同じく一部の特化機体に不利判定が付き、地力で上を行かれると対処ができなくなる欠点もある。

そうこうしている間に真耶が撃ったグレネード弾が二人を撃墜した。

「これで諸君にも教員の实力が分かっただろう。以後——「まゝ」
やん——」

目がきらきらと輝いているシドが突撃してくる。

「次は俺t」

千冬足を払われる。

「何するんだ教師」

「今は授業中だ。構って欲しければ後にしろ」

「くっ！絶対お前ともやってやるからな！！」

人の申し込み（ラブコール）をのりくらりとかわしやがって

「織斑先生だ」

「絶対だからな」

シドは足音荒く戻っていく。

「まったく…最近の奴は年上に対する敬意が足りん」

普段はただの馬鹿だが戦闘になると幼稚園児並みに反応する。

強さが攻撃力だけじゃないのはをあいっは知っているようだが、いろいろと足りなすぎる。

主に思慮と我慢

「まあまあ。

彼女にも悪気はないんですから……多分」

「はあ……では、グループになって実習を行ってもらおう。
専用機持ちがリーダーになる事」

グループになると、早速一悶着起こった。

女子達が一夏とシャルルにアプローチをかけ始めたのだ。
まあ彼女達は千冬先生による熱い教育が待っていたが。

「ねえシドちゃん。早く始めようよ」

「チョット待て。あとちゃん付けするな!!」

シドは極低温、全力拒絶、貴様ら格下の相手をするだけ時間の無駄
だ!!なオーラを振りまくラウラの背後に音も気配もなく近づき――

「少しはフレンドリーに接しろ」

尻を撫でた。

痴漢もののエロゲに負けないくらい見事な手つきで。

「くああああああああ」

怪鳥音と共に回し蹴りが放たれるがシドは普通に避ける。

「きいいいさまああああああっ!!」

負積塗れのロボアニメのおかつぱ頭の隊長のような言い方で連打を
放つが総て避けるか防がれる。

「ふあはははは」

あいかわらず余裕がないなラウは」

「五月蠅い!!」

だいたい貴様も教官もここにいること自体が間違っているのだ!!」

シドは避けながら千冬から離れていく。

「俺も教師も今をエンジョイしているんだが」

「シドさっくん、乱闘するならせめて私達の目の届かない場所ですてくさい!!」

真耶がシドを、千冬がラウラを取り押さえる。

ただしシドは関節技を決められながら地面に押さえつけられてるが。

「いやいや、こいつが付き合い悪いから緊張を解きほぐそうと……」

「問答無用です」

「私は教官の次くらいにお前を尊敬している。

お前は私が目指す道の一つだ」

「人に勧めれるような生き方はしてないんだがなあ」

ばやきながらシドは立ち上がる。

決められてる関節が痛いのが気にしない。

「お前も教官もこんなところで燻っているべき人間ではない
お前も教官ももっと広い場所で生きるべき人間だ!!」

そう言ってラウラは押し黙る。

「まったく…尻を触ったくらいでなんでこんなに怒るのかね」

「シドさん…少しはデリカシーというものを学んでください」

あいつ（ピスキス）にも言われたけど、デリカシーってなんだ？

昼休みにラウラとシドはIS（PIC無し）でアリーナ十周することになった

シドは重量の関係上打鉄を使っているが――

「はべっ」

「ふばっ」

「あばた」

「さいこっ」

「……無様だな」

うるせえ

「勝手が違いすぎんだよ」

コンパス無駄に長いし腕長いからバランスが取れねえ
ISのバランス保持機能つてのがあってもカバーできねえ
要するにあるけもしねえ

「先に行ってるぞ」

「まてこb」

楽しそうな顔しやがって……あいかわらず教師馬鹿で堅物で性格悪い奴だな。

そんなんで向こうでやっていけたのかねえ？

まあイチ力に対する態度見てたら問題だらけなんだろうが……独りでやってけるほど甘くないぞ世の中は。

利用なり協力なりしてかねえと生きてけねえし、そんな肩肘張ってたら窮屈でしかたねえ

「気楽に生きればいいんだが……あいつの生れとか育ちとか考えたら無理なんだろうな」

正直大分卑屈は入ってるだろうから無視したいが、飯おごってもらった手前ほうっておくのは性に合わない。

だが――

「まっ……俺よりイチ力のほうが適任だな」

男だし

「残り9周……頑張るか」

こけてる間に昼休みは終わった。

その間一夏はシャルルの笑顔に、萌えていた。

着火7 零落白夜と絢爛舞踏って明鏡止水っぽいよね？（前書き）

ブリュンヒルデってある意味不名誉者でかなり不幸な奴だよ、神話的に。

だから原作であんなに強そうな感じに描写されてるけど千冬ってあまりすごくないんだ！！

着火7 零落白夜と絢爛舞踏って明鏡止水っぽいよね？

翌日 一夏はアリーナに練習に来ていたが

「回避のときはこうギュ・ンといってズガンだ」

「なんとなく分かるでしょ？感覚よ、感覚」

「防御の時は右半身を斜め前に5度。回避のときは後方に20度ですわ」

思い思いのことを言われていた

「率直に言わせてもらっ」

一夏は三馬鹿に

「全然分からん!!」

一夏は思いつきり怒鳴る。

セシリアはまだいい。

分からないけどまだいい。

だが箒と鈴はもはや単語ですらない

「分からないのか!？」

「ちゃんと聞きなさいよ!」

「もう一度説明いたしますわ」

「一夏く」

「イチカ、特訓の時間だ」

声がしたほうを向いてみると、オレンジ色のリヴァイブに似たISをつけたシャルルと、大量の武器を乗せたリヤカーを引いたシドがいた。

「シャルル！それに…シドだよな？」

汗だけで人相が判別し辛いほど疲れきった表情だった。

「さすがに……生身で武器三十種類と模擬弾一式は重すぎた」

IS使えよ…ていうか二百キロはあるぞそれ

「いけると思ったんだよ…実際途中までいけた」

行けたのかよ

「ボクの武器かしてあげるって言ったのに聞かないんだよ」

「なんとなく一夏に馴染みそうな奴だけ持ってきたんだよ。
お前の銃はお前に馴染んでるんだから使わずれえんだよ」

「ここの諺にはこうぼうはふでをえらばずってのがあるよ？」

「その道のプロは拘りまくりです」

いいながらシドはネームレスを出し、ウエポンラックを体中に付け、そこに武器を取り付けていく。

サイズ差が結構あるから武器に埋まってる感じがする。

「準備があるからそつちで勝手にやってくれ」

「うん。」

一夏、チョット相手してくれる？
白式と戦ってみたいんだ」

「分かった。」

というわけで、また後でな」

コレ幸いといわんばかりの一夏に三人娘はむっとする。

「そんじゃよーい」

シドはハンドガンを天に掲げて発砲する。
それを合図に一夏とシャルルは戦闘を開始。

「うおらああああああああああ」

雄叫びを上げながら一夏は雪片を投擲。

「なっ」

「ええっ」

剣術を無視した芸当に筈は、唯一の武器を投げるとは思わなかった
シャルルは同時に驚く。

それでもシャルルは左腕のシールドで雪片を上空に弾くが、先回りしていた一夏が回収し、一気に振り下ろす。

「！！！」

シャルルは一瞬でバズーカを出し、一夏ではなく地面に撃ち込み反動を利用して離脱する。

「逃がすか！！」

一夏は篠ノ之流古武術『地疾り（じばしり）』を使って初動を速め、ブースターを噴かして間合いを詰めようとする。だがシャルルも加速するまでの隙を突いて両手にショットガンを出し、発射する。

「せりゃああつ」

一夏は地面を吹き飛ばし、砂利で強引にそらす。

「一夏さん…戦い方が大分野蛮になりましたわね」

「その上そこに技術があるから余計性質が悪いわ」

シドの喧嘩殺法と箒の技術が一夏の中で融合し、新たな形に昇華されていた。

元々才能はあったが故にできた事象といってもいい。

だがシャルルはあえて詰めてショットガンを叩き込み、怯んだ所を離れながらライフルで狙い撃つ事で勝利した。

「上手くいくと思ったんだけどな…」

とにかく間合いに入れないとダメなのでチョット小細工してみたが、
今一だ。

しよっぱなから瞬時加速も入れてみるべきか…

「多分だけど、一夏って射撃武器の特性を理解しきってないんだと思うんだ」

「ん〜。一応分かってるつもりんだけど…」

「頭で分かっても体が動けなきゃ意味ねえだろ」

武器人間状態のシドがやってくる。

「今回はとにかく銃の練習だったんだが……分かりやすく教えられる文系がいたんじゃ体育会系の俺は退かせてもらっわ」

どっちかって言うと野獣系女子だと思う。

「なんか言ったか？」

「イヤベツニ」

「あつそ…」

「ボクは理数系だよ」

「「いやそついう問題じゃないと思う」「」

「まあそれはそうとして、とりあえず実際に撃ってみようか」

アリーナにターゲット用的が現れる。

シドはリヤカーに積んでいたライフルを渡す。

「これって学校の備品だから使えるんだろうけど、他の人の武器ってどうなるんだ？」

「基本的には使えないけど、持ち主が許可したら使えるよ。こんな感じで」

シャルルはディスプレイを操作して白式に転送すると、ライフルの使用許可が下りていた。

「へ〜」

「ついでだから色々許可してやれ」

「いやだよさすがにそれは」

まあ自分の武器が奪われたらそれだけ不利になるしな

「じゃあとりあえず構えてみようか」

構え方からレクチャーするシャルルとレクチャーされる一夏の姿は、すごく絵になっている

「コレで次のコミケはもらった!!」

あと腐女子の創作意欲を書き立てていた。

「シャルル……向ここの奴撃って良いか」

「よく分からないけど我慢して」

的を撃つてみたら、案外良い線いつていた。

「なんていうか…速いって感想だ」

「覚えとけよ一夏。」

銃つてのは当たると痛いつて事をな。
覚えておけば大分違うぞ」

そう言つて肋骨の隙間辺りに銃口を押し付けてくるけど、地味に痛い。

銃口をどかせたのと一緒くらいに歓声が聞こえてくる。

向けている方を見ると

「ラウラ……」

漆黒のISを纏つたラウラが立っていた。

名前はシュヴァルツェア・レーゲン（黒い雨）。

カラーリングはネームレスと同じく黒ベースだが毒の塊のようなネームレスと異なり、要塞をイメージさせる重厚感があつた。

「ラウ……昨日旨い飲み屋見つけたんだが、今夜行くか？」

シドは数日で食堂の料理を全種類食べつくしたので、割と外に出ていた。

無許可で（曰くばれなければどうということはない）。

「私はそういうのに興味がないといっているだろ」

溜息をついて一夏をにらむ。

視線に宿るのは敵意。

「織斑一夏。私と戦え」

「いやだ、やる理由がねえよ」

「私にはある」

どうもラウラは千冬姉がモンド・グロッソの二連覇を辞退する原因になったオレを嫌ってるみたいだ。

それに関してオレも責任は感じている。ただ、他人に恨まれる筋合いはない。多分ない

「今じゃなくてもいいだろ？
もうじきトーナメントがあるんだから」

「火付きが悪い男だな。
なら——少し油を注いでやろう」

そついうとともに機体右側に折りたたまれていた砲身が展開され、電磁加速された砲弾が発射される。

「「一夏！」」
イチカ

シャルルとシドが動いたのは同時だった。

シャルルはシールドで砲弾を防ごうとし、その前に出されたシドの超高温の掌が砲弾を消し去る。

「ラウ、喧嘩をやるなら相手の同意がないとやっちゃいけないって教えたはずだぜ？
売るのはいいがな」

シドは不機嫌そうな目つきで言う。

ラウラの事は一応は認めている。

人生の流れが似ているから共感するところもある
だから蛮行を見過ごすわけにはいかない。

「いきなり発砲なんて、ドイツ人は気が短いんだね」

「フランスの第二世代ごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの再三世代型よりは動ける
だろうけどな」

互いに挑発しながら攻撃の機をうかがう。

だがシャルロットは自分のほうが圧倒的に不利だと確信していた。

第一に性能差。

原型のリヴァイブも第三世代並とはいえそれは初期型程度。

容量をメインに色々とカスタムしたラファール・リヴァイブ・カスタム？でも大分危うい。

第二に技量差。

強さとは身のこなしから察せるもので、ラウラと自分では結構差がある。

そしてなにより……噂の機能の完成度しだいでは、一対一で勝てる

可能性はない。

一夏かシドと一緒に戦う？

いや、一夏に迷惑をかけるわけには行かないし、シドは協力してくれるわけがない。

何でかしらないけど彼女はボクを嫌っている。

そして彼女は自分以外のために戦わないことを公言している。

嫌いな人間に力を貸す気は、彼女にははなからないだろう。どうすべきか考えていると

そこ！！いったい何をやっているの！！？

外から助け舟が来た。

「ふっ…今回は退いてやろう」

次会ったら負けそんな台詞をはいてラウラはISを解除し、去っていく。

いったい二人の間に何があったのだろうか…機能のことも含めてそう思わせた。

そして夕方

「今日はどうすつかねー」

学食はコンプリートしたけど、外で食べる気にはなれないし……ミックス料理――

「カレー親子丼でもやってみる……」

「シド」

「ラウ？なんだ？」

「少し話がしたい。時間は空いているか？」

「逆に聞くが、飯食いながらもいいか？」

「……いいだろう」

「俺も聞きたかったことがあるしな」

二人は屋上に行く。

夕焼けが少し眩しいが風通りがよくて気持ちいい。

二人はカツカレー丼とヨーグルトを食べ始める。

軍人のラウラは間食を嫌うだが、コレくらいの空気は読む。

シドの尻拭いの果てに手に入れた悲しいスキルだ

「こうやって一緒に食うのは…何時ぶりだった？」

「4ヶ月半くらいだな。」

ちなみに出会いはインド軍のIS部隊との合同演習で貴様を紹介されたからだ」

上官に癖は強いが実力は本物だといわれたが、文字通りの意味だったのはいいやな思っ出だ。

あの時私はこいつの尻拭いをしろといわれたようなものだ。

じっさい軍なんて糞食らえといわんばかりの行動には手を焼かされ

たし付き合わされた。

「貴様のせいで私の胃はストレスでやられていた」

見事な胃潰瘍だった…

だがこいつと過ごすのが嫌だったかと聞かれると、返答に困るが…

「私はお前が嫌いだ。

私の理想とあまりにもかけ離れているお前が嫌いだ」

お前の理想ね……

「強く、強固で、規範となれる人間…あの女みたいな人間になりた
いってことか？」

「そうだ。

あの方は私を救ってくれた。

その日から私はあの人のようになりたいと思い、励んできた」

そうした中で、お前と出会った。

「お前は訓練を基本サボるわ夜遊びするわと私を苛立たせた。
だが、お前の強さだけは認めている。

何者にも媚びず、諂わず、確固たる意志を持っているお前を」

「俺はそんなにご大層なもんじゃねえよ。

好き勝手に生きて好き勝手に死ぬ一匹狼だ。

オシリスにいるのも好き勝手生きてく手段でしかねえ。

好き勝手生きてくためにゃあ力が必要しな」

「ならなぜこのようなところにいる。

お前も…お前なら尚更分かるはずだ!!

この人間はISをただのファクション程度にしか考えていない!!
そんな程度の連中のところにお前も教官もいるのは時間と労力の無駄だ!!」

そうだ!!お前も教官もいるべき場所がある!!

それは少なくともここじゃない!

「は~~~~~」

コレだけは言つとくぞ、ラウ。

俺は馬鹿だから少し勉強しろって上にいわれてここに来た。
要するに俺は当分は帰れねえ。

あとお前も知ってるだろうが、俺の候補生で入れる条件を知ってるか?

「結果を残す。だろ?」

「そおだ。

俺はとりあえず結果を残さなくちゃいけねえ。
それもできるだけ優秀な奴をだ」

不本意だが、力を手に入れれるなら多少の鎖は我慢してやる。
そのうち引きちぎってやるがな

「ここにいりゃいろんな行事がある。
ポイントかせぎにゃあちようどいい」

「ようするに俺は当分出れねえってこった」

「そうか…残念だ」

そついう割には全然あきらめてねえよな？

そついう奴好きだけど

「逆に聞くが、お前は何でイチ力を嫌うんだ？」

俺の嫌いと違って私怨が入ってる感じだったがよ

「あいつは——」

簡単に説明すると一夏が誘拐されて千冬が救出のために大会を抜け出したせいで優勝を逃したことを恨んでいるといった感じだ。

その時手伝ってくれたドイツ軍に恩を返すために一年ぐらい教官をやったらしい。

すっげえ見当はずれ……

時期的に俺と会う前だし、それが無かったら出会いは無かっただろ？
まあ今のこいつに言っても無駄だし言わない。

「久々にお前と話せて楽しかった」

「嘘付け」

「さてな」

そつ言つて立ち去ろうとする。

「どこに行く気だ？」

「教官を説得しに行く」

「やゝめとけって」

あいつは頑固どころか強固だから絶対聞かないだろうし、拒絶されたら間違いなく暴走する。

具体的には分からんが間違いなく暴走する。
しても面倒臭いからとめない

「俺は嫌だぜ？」

昔と逆でお前の尻拭いするのは」

「安心しろ。お前よりは大人だ」

「見てる世界が狭いお前のほうが十分ガキだ」

「そうか。ではそのうち旅にでも出るとしよう」

「頑張れよ〜」

「あの野郎…」

器普通に置いていきやがった…

あの後寮でチラツと見えたが、当然ダメだったようだ

夜

「……一夏に警告くらいしてやるか」

恩も売れるしちょうどいい。

って言うか特にやることないから暇だ。

日曜にでも何か買いに行こう。

「イチカ〜」

いない？

「無用心な奴だな……」

財布をナチュラルに捜し始めると、シャワーの音が聞こえてくる。

「風呂か？」

とりあえず顔だけ出しておくか

「イチカ〜」。はいって……」

正直に言おう

マジで驚いた

「シャルル　　ボディーソー」

あ……ありのままに起こった事を話すぜ

オレはボディーソープをシャルルに渡しに言った。

そこには何でかシドがいたけどそれはいい。

だけど意外とよく見えるシャルルの胸はたくましい大胸筋じゃなくて見事なおっぱいだった

な……何が起こってるのかわからないがオレも　何が起こっているのか　わからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…

性転換だとかネコ型ロボットのの道具だとかそんなチャチなもんじやあ　断じてない

もつと恐ろしいものの片鱗を　味わったぜ…

軽く錯乱したシャルルを二人で落ち着かせた後、シャルルは少しずつ話してくれた。

自分は女で、本当の名前はシャルロット・デュノアであること
自分がデュノア社の社長と愛人の間に生まれた娘だという事。

母親が死んでからの二年間、父親の道具として過ごしていたという事
IS開発最後発故に第三世代ISの開発が遅れていて、逆転のヒントを得る為に白式のデータを盗むように命令された事。

「はあ……ホントの事話したらスッキリした。聞いてくれてありがとう。」

それと、今までだましてごめん」

「いいのか？それで」

「いいか悪いかじゃないよ……」

シャルルの表情は悲しみとかそういうのではなく、諦観と諦めが混ざったものだった。

それを見た瞬間、二人はシャルロットの両肩をそれぞれつかむ。

「いいわけないだろ！！」

そりゃ親がいないと子供は生まれない。

でも、何をしてもいいわけじゃない！！」

「俺はお前のその顔が大嫌いなんだよ。」

あきらめて何もかもどうでもいいって思ってるような顔がよ……

なんで反抗しねえ……なんで自分を道具扱いする奴に逆らおうとしねえ」

「二人とも……」

「俺もシドも形は違うけど両親がいない。」

俺は会いたいと思わないしシドは気にかけてもいない。だけど、そいつが間違ってるって思う」

「お前は どうしたい。」

お前を利用する奴らを どうしたい」

二人は怒っていた。

一夏はこんなになるまでシャルロットの心を疲弊させたシャルロットの父親に対して。

シドはこんなになるまで何もしなかったシャルロット自身に。

「どうって言われても……」

女だっただけだから本国送りだろうし、よくて牢屋行きかな」

「「だっただけここにいろ（力を貸してやる）！！」」

「え？」

「オレ達が黙ってたなら、誰にもバレやしない。

それに、ばれたとしても」

「脅しをかければイチコロだ」

「そうじゃなくて、IS学園特記事項に在学中はあらゆる団体に帰属しないって書いてある。

つまり、三年間考える時間がある」

しがらみってどこにいても残るもんで、特記事項なんて基本建前なんだがなあ。

見方を変えれば俺達はIS学園の兵隊って見れるし

「特記事項って55個もあるのに、よくおぼえてたね」

「勤勉なんだよ」

一夏の鼻が某麦藁の狙撃手みたいになる。

「一夏…シド…」

「「ん??」「」

「かばってくれて、ありがとう」

そういったときのシャルロットの顔に、希望の光が見える。

「いい顔になったじゃねえか。」

そういう顔がいつぱいあるほうが飯が旨い」

「飯のためかよ、シャルロットに怒ったの」

「飯は大事だぞ。」

家がなくても腹が膨れれば幸せになれる。

雨風凌げりやなお良いがな」

やたらに実感こもってて二人は少し疑問に思う。

「なあシャル…」

シャルロットのほうを向いた一夏は一気に首を九十度曲げる。

「どうしたの？」

「む　胸が…」

シャルロットは自分の胸を見ると、着ていたジャージがつまいこと

ちらリズムを作っていた。

「気になる？」

「当たり前だろ！！？」

俺だつて男だぞ…

「イチカ…」

「なんだ、シド」

「二時間だけ見張つててやる。
頑張つて男を見せる」

何言ッデヅンディスカ

「ふえええええ」

ほら！！シャルロットも驚いてるし

「優しくしてね」

あれ…………？

「冗談だ」

「変な想像しちゃつて。一夏のエッチ」

「まったく、これだから思春期の男はいけない。」

近頃の男の子はやんちゃで困る」

「まったくだよね」

「お前ら絶対組んでただろ！！？」

おちよくられるのはいやだけど

シャルロットも大分元気になったからいいか…

ノック音が聞こえてくる。

「一夏さんいらつしやいますか？」

夕食はまだとられていないようですが、おかげんは悪いのですか？」

「「「！！！！」」」

この声は、セシリア！！？

マズイ！！今入ってこられたらすごくマズイ！！

「入りますわよ」

セシリアは扉を開けようとするが、開かない。

「開きませんわね。

どこにいったんでしょう」

ISを両脚だけに展開して飛翔したシドが押し返していた。

シドはサムズアップし、二人もそれで返す。

「ちょっと経ったらデュノアの飯でも取りに行け」

「ああ。

ところでさ」

「なんだ？」

「お前とラウラって知り合いなんだよな」

「それが？」

「あいつと上手く付き合う方法を教えてくれ」

なんだかんだで気に入られているお前なら方法を知っているはずだ。千冬以外とは会話をしようとしなない彼女と話すには唯一話すシドを頼るしかないと思ったが、

「俺があいつより強いからだろ。」

あいつ、強い奴が好きみたいだし」

それってすごくハードル高いんだけど。

「けどなあ…あいつの好きは俺のとは大分違うんだよなあ」

「違う？」

「おお。

俺の好きは戦いがいがあるって意味だし、戦ってる一瞬が好きなんだ…」

俺はあの一瞬が好きだ。

互いの意思をぶつけ合う一瞬が

拳を叩きつける一瞬が

拳を叩きつけられる一瞬が

勝利する一瞬が

相手の中身を感じ取れる一瞬が
けど

「——あいつあ相手の力しか見てないんだよな」

そいつがどういう理由で強くなったのかも

そいつがどういう風に強くなったのかも

どうして強くなったのかも

原因も過程も結果も見えていない。

ただ強いというところしか見ていない。

俺はそういうのも含めて叩き潰すのが好きだから見てるだけだし個人差もある

けどあいつの場合極端すぎる上に依存レベルでべったりだ。
来る前にチラッと見たが、様子が変だったし……

「いやな予感がするぜ」

この予感が、見事的中することを、誰も知る由はなかった

着火7 零落白夜と絢爛舞踏って明鏡止水っぽいよね？（後書き）

これ以降も篠ノ之流の怪しい技が出てきます

着火8 切れちまったぜ 久々によ（前書き）

長かった。

後ここからある程度オリジナル展開です

着火8 切れちまったぜ 久々によ

二日後の休憩時間、シドは屋上でサンドイッチを齧りながら考え事をしていた

「……デユノアの件をどうするかだ」

あいつのことは嫌いだったがやる気を見せてくれたからいくらか好きになった。

それにアレだけ偉そうなことを言った手前、少しわ手伝わないのは少し嫌だ。

「第三世代の材料がいるっばいし、適当なデータやればいいんだが……」

うちの部隊の技術は八割以上パクリだし、インドのピスキスかDr・經由で企業の技術を売らせてもいいがインドと他の国の思想が違すぎる。

そもそも他の国は大量生産前提だが、うち（インド）は基本生産性ガン無視のオーダーメイドだから……カタログスペックは高いがその分高いんだよな。

実験機のネームレスは格安だが。

「PICを応用した物質固定はドイツも似たようなの持ってるから不採用。

俺のアレは使いにくすぎるから同じく。

『バット』と『APIC』は送ったら俺が殺られかねん」

唸っていると、人の気配をかんじる。

向いてみると、簾がいた。

「ホウキ、お前も飯か？」

「違う。」

ただ、考え事をしに来ただけだ」

「考え事？」

「ああ。」

今回のリーグマッチで優勝したら一夏と付き合えるということになっているのは、お前も知っているな？」

どういうわけか一夏も知っていたから知っているだろうが。

「ああ。それで？」

「私は勝たねばならん。
だから、全力で戦って負けてくれ」

「お前も意外とトンチの利いた事言っじゃねえか。
全力でやった上で負けるなんてよお」

「私は負けるわけにはいかないんだ。
それに、もう一つ目的がある
だから、全力で戦って負けてくれ」

手加減されたら意味がない。
シド相手に……私の欠片を感じられるこの女に勝てれば、私は私の

目指す強さに近づけたと実感できる。
自分に負けなくらい強くなったと。

「悪いがお前と当たったら即棄権するぞ俺」

「…は？」

どういうことだ。

傲慢になるが私は強い（少なくとも力的な意味で）。
強い奴と戦うのが大好きなこの女がどうして棄権する。

「どうしてだ」

「お前は強いし、今も必死で強くなろうとしてる
そこは評価できるが…つまらないんだよ」

「つまらない？」

「他の連中……たとえば一般の生徒とやりあったとする。
あいつらはこっちに気持ちぶつけてくれるんだよ」

けどな

シドは数泊置いて続ける

「お前の場合でめえ（自分）押さえ込もうと必死な感じがしてつま
らないんだよ。

俺に勝とうとする前から自分に負けないようにするのに必死でつま
らないんだよ。

俺は強くてつまらない相手と闘うのはゴメンだ。
ようするに価値なし」

価値がない奴と喧嘩する気になれない。

中身を感じれなくても感情を向けてくる分一夏の方がマシだ。

「私を馬鹿にしているのか？」

篝の声が怒りで震えている。

シドはやれやれといった風に両手を広げる。

「してねえよ。」

そそらねえ女を抱く気になれねえのと同じ理屈だ。

俺をそそらせたきや叩き潰す気でかかって来い。

そつすりや踊ってやるよ」

「……お前は何の為に強くなろうとする？」

「決まってるんだろ？」

生きて人生楽しむためだ

そう言い残してシドはさっっていく

「楽しむ……か」

私にとって強くなるのは自分を律するためだ。

あの時のような暴力だけの憂さ晴らしの剣を振るわないようにするためだ。

いくなれば枷を作るためだ

だがシドは枷を千切るために力を求める。

暴力を肯定する内面を持ちながらも思想は真逆。

「少し、うらやましいよ」

見習えそうにはないが

「さて…一夏の訓練メニューでも考えるか」

でも、迷いは少し晴れた。

時は進み昼休みの第三アリーナで、鈴とセシリアはラウラとにらみ合っていた

トーナメントに備えて特訓しようとしていた二人にラウラがいきなり攻撃を仕掛けたからだ。

「イギリスのブルーティアーズと中国の甲龍か……データで見たと
きの方が少しは強そうだな」

ラウラは徹頭徹尾見下した態度で文字通り二人を見下ろす

「最近のドイツ人ってのは武器を持ってない上に戦意のない人間相手に攻撃するものなのかしら？」

鈴は苛立たしげに睨み付ける

「落ち着いてください鈴さん。」

こつという駄犬をしつかり調教するのが人間様の義務ですわ」

セシリアも大分きていた。

まあ惚れた男を殴られるわ、威嚇とはいえいきなり攻撃してくるわ、思いつきり他人を見下した態度をとっているわ（ある種の自己嫌悪

も含まれているだろうが）、現在進行形で見下されるわと要因は十分にあるが

「貴様ら程度のやからが同じ第三世代もちとは……我ながら情けない事この上ない

数だけが能な国と古いだけがとりえの国はよほど人材不足と見える」

その言葉に二人の怒りのボルテージが上昇する

「セシリア

私の聞き間違いじゃなかったら『打ってください女王様』的な発言をしたと思うんだけど？」

「奇遇ですわね。私もそう思いますわ」

この程度の挑発で冷静さをなくしつつあるとは……やはりここは教官がいるべき場所ではない

まあお陰でけしかけるのが楽ではあるが……

「で、あんたはどっちとやりたいの？」

どうせスクラップ確定なんだからそれくらいの権利はくれてやるわ」

「羽虫を一匹ずつ相手にするのは面倒なんだな。

両方まとめて潰してやる。

下らん種馬を取り合う牝を相手にするんだ。

それくらいのハンデは必要だろう」

その瞬間……二人のゲージは振り切れた

「アンタ……言っている事と悪いことの区別が付かないみたいね」

「ここにいない人間まで貶めるなんて!!
その口、二度と開かないようにしてあげますわ!!」

「御託はいい。とつと来い」

「「上等^{ですわ}!!」」

「なあイチカ。ラウの奴しらねえか」

「ラウラ？」

「分からないけど、何の用だ」

「というか俺に聞くなよ。」

「まあラウラは友達作る気無いから誰に聞いても似たようなものだろうけど。」

「あいつに確認したいことがあってな」

「確認？」

「あいつは結構我が強いが、強い奴の言うことは聞くだろ？」

「おお」

主に千冬姉。

「あいつともつかい話がしてえ」

なんのためにさ
そう聞いてみると、

「どうにもいやな予感がするんだよ。
あいつ暴走特急気味だから躓くと周りを巻き込みかねえ」

その範囲に自分がいるのは避けたいし、二次被害を受けるのもいやだ。

なので壁を作っておきたい。

俺とイチ力とホウキが無事な範囲は確保したい

「なにもなきゃいいが……」

俺は破壊専門でこの手の小細工は他の奴らの担当なんだがよお。
頑張るかと思気込むと

「一夏！」

「シャルル!!?」

「デュノア？」

どうしたんだ？血相変えて走ってきて

「セシリアと鈴と、ボーデヴィツヒさんが……第三アリーナで戦ってるって……皆が言ってる」

「なんだって!!?」

「あいつ……」

三人は急いでアリーナに向かう。

「一夏」

「なんだ? そんな険しい顔して」

基本おちゃらけてる分、どうも怖い。

「場合によっちゃ、俺は本気でキレる
その時は止めてくれ」

ラウは能力のない人間ばかりがいる(ラウ視点なのであしからず)
IS学院から教師と俺をここからだしたい。

だが教師も俺も個人の理由はさて置き、ここにいたいから誘いに乗
る気はない。

なら極端な能力主義者のラウはどうするか。

答えは簡単だ

能力がないということのをこれ以上ないくらい分かりやすく俺達に見
せ付ける。

セシリアと鈴は教師に近い一夏の関係者で、実力もそれなりにある。
広告塔にはちょうどいい。

まあ俺も教師もその程度で考えを変える気はないし、あれからどれ
だけ進歩したかの確認にもなるから止める気はない

だが——もしやりすぎたら。

戦う事じゃなくて傷つける事を楽しんでいたら俺は怒る。

人でなしのプライドにかけて怒る。

もしもラウがそうになっていたら……自分を抑える自信がない。
下手すれば殺してしまう。

経験上キレるとラウ以外目に入らないだろうから一夏でも勝算はある。

アリーナにたどり着く。

そこでセシリアと鈴がラウラが戦っていたが、ラウラが一方的に勝っていた。

二人は息を切らしISは装甲の一部が完全に破損しているのに対し、ラウラは息一つ乱さず、損傷も軽微だった。

「くらええっ!!」

鈴は最大出力で衝撃砲を発射。

弾丸、砲身ともに不可視のそれは、たとえ進行ルートが分かっても対処が難しい。

だがラウラはそれを避けようとしなない。

発射された空気の砲弾は着弾寸前でいきなり止まり、消滅する。

「無駄だ。」

このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな!」

「龍砲を止めた!!?」

というよりも勢いを0にしたって感じだったぞ!!

「A I Cだ」

それも、かなり完成度と制度が高い。

「だから避けようとしなかったのか!！」

「なんだそれは？」

「シュヴァルツェア・レーゲンの第三世代能力。
アクティブイナーシャルキャンセラー」

「慣性停止能力とも言っ」

「分かりやすく言うなら、見えない手で衝撃砲を掴んだって思えばいい」

「へっ」

まあ欠点はそれなりにあるがな。

カードの共有はなるべくしたくないので言わず、対戦を見守る。
一線を越えないことを柄にもなく願いながら

鈴は衝撃砲を連射するが、AICの前では届く事はない。

「ここまで相性が悪いなんてね…そのうえ」

行動から推測してブルーティアーズのBT兵器は止めれないみたいだが、当たらなければ意味がない。

連携を仕掛けようにも絶妙なタイミングでカットされる。
動きの質も洗練されている。

攻撃のタイミング、間合いの取り方、切り替えの早さ。どれをとっても自分達よりも上だ。

暴力で叩き潰すシドとは別のベクトルの強者。鍛え上げた技術で倒す種類の強者だ。

「ふっ」

ラウラは両手から光刃を出し、鈴めがけて突っ込む

鈴は青龍刀で止め、セシリアはビットを射出して真上から撃ち抜こうとする。

「無駄だ」

短く言うと共にラウラは右腕の光刃を消す、

力を込めていた鈴はつんのめり、隙をさらしてしまう。

ラウラは鈴を空いた腕で殴り飛ばし、矢継ぎ早にAICで総てのビットを止め、鈴に向かって背中から刃のようなものを発射。それはワイヤーと連結していて、それが鈴の足に巻きつく。

「この程度で第三世代兵器とは……笑わせる」

「落ちなさい!!」

セシリアはラウラめがけて動くようになったビットからビームを発射。

ラウラはそれを最小限の動きで回避する。

回避行動の隙を突いて背後からブルーティアーズの腰に付いた砲身からミサイルを発射。

たとえばハイパーセンサーで全方位を見渡せても通常の視界以外は処

理が入るため一泊遅れる。

例え避けたとしてもビットも併用して必殺の体制に誘導する。
だがラウラはあるう事かワイヤーを巻き取って鈴を盾にする

「きゃあああああつ」

「なあつ」

セシリアは驚愕のあまり硬直する。

「返すぞ」

その隙を突いてラウラは機体を回転させながらワイヤーを伸ばし、
鈴をセシリアめがけて叩きつけ、地面に叩き落す
ラウラは軽く接近して砲身を向ける。

それに対して鈴は衝撃砲を発射しようとするが

「この状況でウエイトのある空間圧兵器を使うとは……」

溜め切る前にラウラは砲弾を発射して龍砲を破壊する。

だがとつさにセシリアが発射したミサイルとレーザーを止めれず、
命中した。

「あの距離でミサイルなんて、無茶するじゃない」

盾にされ、叩きつけられたのに加えてで先ほどまでの戦闘で受けた
損傷の影響で甲龍は大分いかれていた。

動くだけで微かに嫌な音が聞こえてくる。

正直結構まずい。

「ああでもしないと届きませんわ」

悔しいですが、彼女と私達では差があります。
向こうのISはブルーティアーズと同じく多人数を同時に相手にすることを重視してるが、試験機と軍用機では完成度が違いすぎる。
第三世代の性質上両者とも未完成と変わらないけれど、差は大きい
ですわ。

「正直に告白しよう」

無機質な声が二人に突き刺さる。

「今のは少し効いた」

煙の中から左手以外無傷のラウラが現れる。

「あのタイミングで…防げるなんて…」

攻撃直後はどんな人間も無防備になる。

ましてや大砲を撃てば反動に対処するためにそれが顕著になる。

自分は最高のタイミングで絶対防御を発動させることができ、なおかつ防御がしにくい場所を狙った。

ミサイルによる目くらましも加えた三段構え。

それなのに防がれた

「悪いが、数ヶ月前に何度も全身砲台のようなISと戦っていたんでな。

不意打ちをされても多少は動けるようになってしまったんだよ。
で、次はどうする？」

やはりこの程度か。

やはり教官にもお前にもここは相応しくない。

教官にはどこか（できればドイツ軍）で教鞭をとってもらい、シドには自軍で好き勝手やってもらおう（いつもと変わらんのは気のせいだ）。

だから……

「ないのなら——」

加減も容赦もなく

「こちらの番だ」

潰す。

言うが早い！ 4本のワイヤーブレードが発射され、セシリアと鈴の首、腹、足にそれぞれ絡みつく。

ラウラはISによって高まった腕力を駆使して鈴にまきつけたワイヤーを掴んで操り引き倒し、高空から踏みつける。

そのままセシリアをワイヤーを巻き取る力で引き寄せながら自身も跳んで爪先を減り込ませる。

まともに動けないのをいい事に一方的に攻撃する。

打撃と首締めで生命維持警告をしらせる

「ひどい！！ 一方的だよ！」

「あのままダメージが蓄積されれば… ISどころか二人が持たないぞ」

「止めるラウラ!!
やめろおおおおお!!」

一夏はアリーナのフィールドを殴りながら叫ぶが、当然聞かない。ラウラは倒れている二人を見下ろし、さっきまでの仏頂面と打って変わって愉悦の笑みを浮かべる。

それを見た瞬間――

――夏の中で何かが弾け、シドは切れた。

「おおおおおおおおおおおおおお」

雄叫びを上げながら二人は同時にISを展開（シドは兜も装備）。

一夏は零落白夜で、シドは極限にまで高ぶった感情でブーストした拳でフィールドを破壊する。

R H A A A A A A A A ! ! !

[illegible]

!!!

ラウラはシドの殺気に恐怖しながらもAICで止め、鈴とセシリアを一夏に叩きつけ、アリーナの端まで吹き飛ばす

許さない

俺はお前を許さない

戦う事と傷つける事。

そこには微妙な差がある。

あるっ たらある！！

だから傷つける事を楽しんだこいつを絶対に許さない。
死ぬほど殴る。

ISが消えたら生身で殴る。
半殺しレベルまで殴る。

「GRRRAAAAAAAAAA」

咆哮と同時にAICを力ずくで引き剥がす。

「なっ！！？」

「大丈夫か、二人とも」

ISが強制解除された二人を安全な場所に運んで一夏は聞く。

「問題ないわ」

「これくらい軽いすわ」

そついうが体が小刻みに震えている。

医者に見せないと危険なのが素人目でもわかった

「悪いけど、少しここで待っててくれ」

「どうなされるおつもりですか？」

「シドを止める」

あいつ、完全に切れててラウラになにするか分かったもんじゃない。
残りエネルギーが結構危ないけど、やるしかない

「やめといたほうがいいわよ。
あいつ、完全にキTERし」

雄叫びを上げながら炎と拳を振り回す姿はもはや魔獣のそれだ。

「それでも頼まれたからな。
止めてくれって」

「SHAAAAAAAAAAAAA」

振り下ろされる拳をラウラは後ろに下がってかわし、当たった地面が陥没する。

「シド…なぜお前が怒る
こんな力のない連中を守ろうとする」

そんなもんはどうでもいい
今のお前は俺が一番嫌いな人種なんだよ。
そういう手合いを殺ろうとしてなにが悪い？
つてえわけでよお……

「JACH」

手足の一本や二本どころか命亡くしてもかまわねえよなあああ

両手から炎の刀（曲刀型）を出し、複数の噴出音と共に一瞬で背後に回る。

「その動きは知っている!!」

瞬時加速以上の速度による短距離疾走と炎の噴出による急速方向転換。

一瞬で間合いを詰めたと同時に肉眼の死角に逃げるからあたかもワープしたように見える。

だが……何度も同じ手を食うか

ワイヤーブレードを発射してシドの四肢を打ち抜いて吹き飛ばし、すぐさま反転して砲弾を発射する。

A H H H H H H H H H H H H H H H H]

シドは雄叫びを上げながら砲弾を拳で叩き落す。

「あいかわらずむちやくちやな奴だ」

ああ。

やはりお前はこうではないと。

圧倒的力を振るう魔人。

それこそが私が惹かれたお前だ！！

だがシドは大きく吼えた後停止し、顔を上げる。

兜の面で表情は見えないが怒りがありありと見える

「思いっきり叫んだら少し冷えた」

冷めてはいるが怒気は残っている。

それが徐々に消えていき、前兆のように消滅し

「戦つてやるよ

くそ女^{アマ}アアアアアアアアア

爆発した

それと同時に疾走する。

ラウラはA I Cを極大展開する。

だがシドを捕らえることはない。

シドはA I Cの目の前で停止し、両肩から炎を発射する。

「くっ」

炎はビームなどと同じで停止不可能。

故に回避するが、目の前にシドが現れる。

「お前の手は全部知ってんだよ。

イッチまえやあっ!!」

避けられない。そう思った瞬間

「やめろおおおおお!!」

シドめがけて振り下ろされた攻撃が中断させる。

「約束を守ってくれるなんて嬉しいじゃねえかイチカ」

「頼まれなくても…止めてた」

今のお前は普通じゃない。

興が乗ると理性が飛ぶのは経験済みだけど、今回ののは何か違う。

あのまま放っておくとラウラが危険だ。
例えあんな事をした奴でも放っておくわけにはいかない

「そおかそおかい。

どおもテメエも見境がねえ用だなあ
守りてえってのがお前の目的なら相手は選んだほうがいいぜ。
何事も用法容量は守りましようって奴だ」

両腕から炎を出す。

さつきから頭がばらけるし視界が歪むが構わない。
ラウを殴るまでは止まる気はない

「織斑一夏……余計な真似を」

ラウラがオレの横から大砲で狙いをつけてる。
後ろから狙わないのがせめてもの情けらしい

「お前にも用があるんでな。シドのついでに倒させてもらっぞ」

「ふっ…あいつら以下の腕前の癖によく言っ」

両腕から光刃を出す

「丁度いい。教官の目を覚ますためにも、教官の二連覇を阻んだお前を…」

教官に——顔をさせるお前を消す!!」

「お前ら二人は暴れすぎだ。
両方とつちめる」

とはいえエネルギーは残り少し。
どこまでやれる？

「面倒だからお前ら両方つぶれとけっ」

踏み出す寸前で足元に銃弾が突き刺さる。

両手にマシンガンを携えたシャルロットが二人に狙いを定める。

「悪いけど、ボクも一夏と同意権だ。君達二人はやりすぎ」

ラウラはぱっとみでも重傷を負わせてるし、シドは某狂戦士みたいに暴れてアリーナを破壊してるし。

おかげで観客は全員引いてるし。

「ア
アハハハハハ――」

俺の邪魔すんならどうなるのか分かってんだろぅなあ

多人数でヤルのは少し振りだしよお

加減忘れてイツたまま帰ってこれなくても知らねえからなああああ
ああああああ」

開幕の合図と言わんばかりに黒雑じりの赤い炎が噴出し、爆発した
大気が三人に激突する。

四人はそれぞれ武器を構えそれぞれの目標に意識を傾ける
激突しようとしたその時

「そこまでだ」

凜とした威圧感のある声が響き渡り、中断される

声がしたほうを向くと

ISどころかISスーツも着ずにIS用の刀を軽々と持った千冬が歩いてきていた。

「模擬戦をやるのは咎めは線が、ここまでやられると流石に黙認しかねる。」

全員、学年別トーナメントで決着をつけてもらっ

「教官がそうおっしゃるのなら」

ラウラはISを解除する。

「織斑、デュノア、シド。
それで構わんな」

「ああ」

「教師にははいと答える！」

「はいつ!!」

「ボクもそれで構わないです」

「では、学年別トーナメントまでの一切の私闘を禁止する」

解散を宣言されたが、一夏はシドが黙っている事を不気味に思った。

夕方、医務室のベッドで包帯だらけのセシリアと鈴は元気にしていた。

「別に助けられなくてよかったのに」

「あのままやっていれば勝っていましたわ」

「黙れ死に損ないども」

シドは辛辣に言い放つ。

「まあまあ。」

そういわないで、二人は一夏のために頑張ったんだからさ」

「あん？」

「「なっ」

後半はこっそりとシドにだけ言ったが、鈴とセシリアには聞こえていた。

「そういや、何で二人はラウラとやりあったんだ？」

わけがわからない一夏。

「それはその…」

「やむ終えない事情といえますか…」

「大方アレだろ。」

ラウがイチカのこと馬鹿にしてお前らがキレ」

「「きゃああああ」」

二人は叫びながら突撃するが、シドは華麗にかわす

「たんだろ」

「ふゝん。ありがとな、オレの為に怒ってくれて」

そういわれて二人は赤くなる。

「それはそうと、二人とも怪我人なのに動きすぎ」

そう言つて二人の肩をつかんだ瞬間、「ぴゃう」と悲鳴を上げて倒れた。

「お前ら馬鹿だな」

「馬鹿つてなによこの大馬鹿!!」

罵られるのを受け流してシドのほうを向く。

「お前はいいのかよ」

「なにがだ？」

「ラウラの事、大分怒ってたみたいだけど」

どちらかというところ狂うって感じだったけど

「最近な……おもいつきやろうと思うたびに邪魔が入るんだよ。お前と最初に喧嘩した時といい今回といいそれでどうやったら邪魔がはいらねえかって考えたんだ。結論から言つて、トーナメントでラウを潰す事にした」

まあその前にやる事があるがな。

そう言つてシドは扉に手をかけようとして

「きゃあああああああああ」

「じゅっ」

突然扉が開き、突撃してきた女子の大群に押しつぶされた。

「シドオオオオオオオオオ!!?」

なんか手足が変な方向向いてるぞ!!

そして「かな〜しみの〜むこ〜えと〜」とかくちずさみはじめるし。

止める！！俺は二股なんてかけてない！！」

「織斑君！！デュノア君！！

私と組んで！！」

皆が一斉に言うが、わけ側からない。

というかシドを無視するな

無視したまま渡された紙にはこう書かれていた

今月のトーナメントはタッグでの参加になる。
ペアができなかったものは、抽選で選ばれる。
できてない人は抽選ということだ

そんなわけで組もうとする女の子達に一夏はシャルロットと組むと
いって切り抜けた。

「一夏！！幼馴染の私と組みなさいよ！！」

「いえ！！

ここはクラスメイトの私が！！」

「黙れ死に損ない共！！

軽くみただけでも打撲と内出血だらけな上に何箇所かヒビ入ってた
だろうが！」

鈴とセシリアが一夏に抱きつく。

復活したシドが怒鳴る。

技術がに発達してるから当日までには治るが、それでも微妙だ。

「「そんなもの気合ですわ（よ）！！」」

どこのアニマルだ…どこの

「だめです！！

そうじゃなくてもお二人のISはダメージレベルがCを超えています。

当分は休ませないと大変なことになりますよ」

やってきた真耶が言う

だがそういわれて我の強い二人が引き下がるはずは

「判ったわ」

「それは、仕方ないですわね」

あれ？

「そうしたんだ二人とも？

いつもなら食い下がるのに」

「あんだ、ISのダメージレベルが与える機体への影響も知らないの！！？」

「どんなだ？」

シャルロットが言うにはレベルCの状態で動かすと動力バイパスを変に構築してしまつて通常時に悪影響が出るとのことだ。
なおDまでいくとまず動かないらしい。

「へ〜〜〜」

知らなかった…それはそうと皆の冷たい視線が痛い。
そして、シドはなぜか俺と似た顔をしていた

夜　一夏とシャルロットが寮に帰っていた

「一夏…かばってくれてありがとう」

「なにがだ？」

「ほら、保健室で、トーナメントのペアの事言い出してくれたよね？」

「ああ、あれか？」

「うん」

「ほら、他の誰かと組んでお前が女だってばれたら大変だもんな」

「一夏は優しいね」

でも気付いてる？

一夏の優しさが

「そっかな？」

「うん！」

いろんな人を傷つけてって

同じ頃、シドは学自室でルームメイトに愚痴っていた

「あの野郎、ちょっと見ない間にいけない女になり下がりがあって。」

「いつてえどこういう教育受けてんだよ。」

「親の顔見てみてえわ」

この憤りはラウの分に足しとこつ。

うん、そうしよう

シドの怒気受け流しながら同部屋の少女が返す

「たしかにボーデヴィツヒさんはやりすぎだけど…シドちゃんはどうする気」

「ボコる。」

「とりあえず全力でボコる」

シドは鮫の様な笑みを浮かべ

「うわ〜」

ルームメイトは引く

「まあ当面の問題は組む相方だが——」

「私はやらないから」

人間台風みたいなあんたの近くにいたら、こっちの身が持たないし…

「お前じゃ役不足だ」

「ひどっ」

「イエスノーハッキリするタイプなんでな。
相手のうそだけ気にしてりゃ楽できる」

「…それって楽しいの？」

「あん？」

「他人の考えばかり気にして楽しいの？」

「楽しいかどうかじゃねえよ。
必要だから疑ってただけだ」

あそこは信頼と嘘がごっちゃになったところだったし……まずは疑わないとあの世かエロゲ行きだからな

「それに、信用できる奴は何人かいたから困りはしなかった」

「そう…」

ルームメイトはさびしそうな顔をする。
言葉の中に含まれた意味を察してしまったから

「友達つて、いないんだね」

学園でもそうだけど、この子は他人から一線引いてるいつも一緒にいる織斑君達にもだ。

「いなくて困らないものを作る必要なんてねえだろ」

「間違ってるよそんなこと!!」

ルームメイトは怒鳴る

「どうしたんだよいきなり」

「友達つて必要なんだよ!!」

いるととってもあつたかい気持ちになれるんだよ!!」

「そっついわれてもな…」

人生振り返つても殺しあうか喧嘩するかぐらいしかないからな…

そんなんでダチなんざできるわけねえし

第一いてもメリットねえし

人質とられるデメリットしかねえし

「少なくとも、シドちゃんがいつも言う損得なんかとは比べ物にならないんだから!!」

「興味深いこと言うじゃねえか」

人間なんざ極論で言ったら損得だ
結婚だつてそうした方が得だからするもんだし、徒党を組むのだつてそうだ

ダチ作るのだって変わらんだろうさ

「友情じゃダメなら、恋ってしてみたほうがいいよ」

「恋だ？」

それこそいらねえよ。

第一わからねえ

「恋ってのはするだけで変わるの！！

するだけで安宅可くなれるの！！

だからしてみなよ、恋！！」

「はいはい。

ここじゃイチカ位しか男がいねえし、第一あいつは好きじゃねえ」

主体性つてのがないやつは少なくとも論外だ。

守ろうとするのは立派だが、結局のところやられたからやるって受け身だ。

後出しなんかじゃ手遅れになる時がある

盾だけじゃなくて剣がねえ奴には守るなんてできない

「かつこいいと思うんだけどな」

「見てくれより中身なんだよ。

あいつは面白味はあるが、そんだけだ」

「チエツク厳しいな」

だったらどんなのが好みなの？」

「……最低条件は俺を食わせれる奴だな」

興味ないがこれは必須
飯食えないと生きてけねえし

「現実的だね〜」
ちなみに私のタイプはね……」

ラウとやる時の相方、どうしたもんか

シドが恋バナをされてる頃一夏は

一夏はシャルルの尻を見ていた。

そもそもなんでこうなったのか。一夏は思案する。
自分はシャルロットと背中合わせで着替え始めて、音が聞こえたら
振り向いたら尻を向けた倒れてるシャルロットがいて、叫びそうだ
ったのに驚いて踏み出したら自分で自分の足に引っ掛かって――

「パンツをつかんじゃったわけだ」

「一夏……いいたいことがあるなら聞くよ」

羞恥心のあまり思考がクリアになったシャルロットが平坦な声で聞
く。

「いい尻だ」

官能的だ

だが無意味だ」

「……」

無言でシャルロットは一夏の顔面を蹴り飛ばした。

「まったく……そんなことしなくても言ってくれば、いくらでも——って何いってんだよ僕は——！」

ノーパンで身もだえするシャルロットにどこからともなく「そのまま犯れ」と言う声が聞こえた気がした。

試合当日

「さて……」

手足を動かしながらシドはモニターを見る。

結局相方になれるような奴は見つからなかった。

おかげでどっかの誰かとペア組むことになって面倒でしかない
まあ誰と組むことになっても

「ぜってゝ潰す。
必ず潰す」

主に顔面

「一夏、気分はどう」

「悪くない…」

やることは全部やった
あとは——ラウラを倒すだけだ

「一夏はオルコットさんのことだけ考えてるんだね」

「あ…ああ」

「あまり感情的にならないでね
オルコットさんは同年代じゃ間違いなく最強なんだから」

攻撃力ならシドがトップだろうけど、総合力なら間違いなく最強だ。

「ああ。わかってる」

スクリーンに対戦票が出てくる

「対戦相手が決まったね」

そっいつて見るが、とんでもないことになっていた

「えっ!!?」

「うそだろ」

「何がどうなってこういうオチになんだよちくしょう!!」

トーナメント表に映っていたのは

一回戦

織斑一夏、シャルロット・デュノアVSラウラ・ヴォーデビッヒ、
シド

波乱以外感じられないカードだった

着火8 切れちまったぜ 久々によ（後書き）

戦闘はこいつならこれくらいはできるをイメージしてやってます。
原作的に多少どころか過分に誇張はあるでしょうがご勘弁ください

着火9 激突 暴走×2（前書き）

この作品の千冬姉は無茶でも弟の本気の頼みを聞けます。
ようするに原作よりもある意味厳しいけど優しいです
あとこの作品に、主人公補正はあまりありません

着火9 激突 暴走×2

「まさか一回戦で当たるとはな。
待つ手間が省けたというものだ」

腕組みをしたラウラが一夏を見下した風に見る
完全にシャルロットを眼中に入れていない

「オレもだ。
こんなに早くやれるなんてな」

正直相手はハンパなもんじゃないけど負ける気がしない
他人を頼らないラウラと超個人主義のシドが相手なら、いくらでも
つけいれる

お前達は強い。
だけど、だからこそオレ達が勝つ
だから――

「倒させてもらうぞ。
ラウラ！！
シド！！！！」

「身の程というものを教えてやる」
カウントがゼロになり、試合が始まる

「最初に言っておくぞ」
シドは静かに言う

「俺はラウをぶつとばす。

だがそれよりも先に邪魔するお前らをブツ飛ばす
というわけで真っ先に死ねイチカ!!」

多人数戦の鉄則。

弱い奴から叩く!!

高速で詰め寄り

「おらあつ!!」

胸を抉らんばかりの突きを放つ。

兜無しでも白式以上の早さだ

一夏は動かない

生身で受ければその箇所周辺が微塵に碎けるシドの突きが白式の脇
装甲を抉り、絶対防御が発動——しない!!

「…テメエ」

一瞬の世界で二人は会話する

「ようやく……できた」

つぶやき一夏はシドを思いっきり殴り飛ばす

「ようやく……届いた!!」

俺がお前と渡り合うためにずっと……ずっとだ!!
ずっと筈に付き合ってもらって鍛え上げた対シド用戦術が!!!!

「お前は速過ぎてオレじゃ先の先も後の先も取れない。
けど…急所をずらしながら相討ちとるだけなら何とかできる」

攻撃直後の硬直を狙えば何とか当てられる。

とはいえ雪片を当てれないからようやく互角なんだろうけど

―左脇装甲及一部消失―

白式が状態を伝えるが、十分戦えるレベルだ。

「……おもしれえ」

シドは笑みを浮かべる。

「そこまで強くなるなんて、鍛えた甲斐があるってもんじゃねえか」

ああそうだ。

これくらいはやってくれないと面白くない。
そうじゃないと仕事にやりがいを感じれない

「俺も少しだけ手を入れてやる」

そう言っただけを転送しようとするが

「させないよ!!」

シャルロットが接近して銃撃と剣撃のコンビネーションで行動を回避に限定する。

弾いてカウンターを取ろうにも絶妙なタイミングで銃撃が来るため

回避以外の選択を取れない。

こと技の柔軟さと華麗さにかけてシャルロット・デュノアは一年の代表候補生の中でも上位にはいる

転送はどれだけ鍛えても一瞬集中する必要がある、その隙に食らえば紙装甲のネームレスではひとたまりもない。

ぶっちゃけ強めの一発「マジヤバイくらいだ。

防御力のなさに反比例して条件がそろえば3の力で絶対防御を普通に貫通することも出来るが

面倒だな……動きは判るが俺じゃどうやっても一瞬止まっちゃうし……不本意だがラウに――

「おおおおおおおおおおお」

そこに一夏が追撃を入れる

だが

「私を忘れてもらっては困るな」

空気同然だったラウラがAICで一夏の右腕を縫い止める。

「塵に消えろ！！織斑一夏！！」

叫び砲身を展開し、砲撃しようとするが、

「くっ！！」

シャルロットはラウラに発砲して引き離す。
だがその隙を突き、シドは兜を装備する。

つまり——ネームレスが完全形態になったということだ

「いったん……」

一瞬で懷にもぐりこみ、額、顎、鳩尾、肝臓、を連打し

「逝つてろおッ」

風穴を開けんばかりの拳を腹目掛けて叩き込む

「ぐっ　　ああああああああっ」

シャルロットはバウンドしながら転がっていき、壁に激突する。
さらにそこへシドが追撃をかける

「シャル!!?」

「どこを見ている!!」

救援に向かおうとする一夏にラウラが迫り

「油断してんじゃねえよ!!」

地面を割り、空気を引き裂きながらシドは一夏に牙を向く。

苛立ちや怒りが乗り、もはやわけのわからない速さで襲い掛かってくる

ラウラの光の刃が一夏の喉下に、シドの超音速の蹴りが腰骨を絶妙な時間差で狙い打つ。

お互い手を組む気は一切ない。

互いに互いを利用しようとした結果、見事なコンビネーションが生まれていた

「づ……あああつ」

引き千切らんばかりに体をひねり、オレはシドの蹴りに足をぶつけてその勢いを利用してラウラの右腕を切り裂き、プラズマブレードを破壊し、エネルギーを一気に持っていく。
代償に左足とエネルギーを持っていかれたが

「咄嗟の機転も利くようになったか」

「お前のおかげで…鍛えられたんだよ」

勢いが乗り切る前にぶつけて相殺以上の結果を出したり（対格差と体重差は一夏の方が圧倒的にある）、力を利用しての緊急回避。ほとんど運任せだけど何とかできるようになった。

さてと

「動けねえデユノアに止めを刺すか、それともラウを利用して挟み潰す」「てああああああ」「!？」

考えている間に復帰したシャルロットがシドに切りかかる
少し油断していて背後からの奇襲なのもあり、攻撃を受け止める。

「案外タフだな」

「君はボク達をなめすぎだよ。
これでも厳しい訓練受けてるんだからね!!」

正直ボディーは効いてて気分が悪いけど、無理をきかせないと勝てない

ナイフを捨て、腕をつかみ、反対の手にグレネードランチャーを出し、零距离で突きつける

「この距離なら、炎は出せないだろ!!」

出せば弾薬に引火して大爆発を起こす。

そうなれば防御力がないネームレスでは負ける

「ちいっ」

「君の敗因は……君の中に誰もいないことだ!!」

そうさ。

一緒に居たいって思えるような人がいない君に、負けるわけがない
!!

大爆発が起こり、二人は吹き飛ぶ

シドはとっさに白い姿になって防御力を上げたようだが、それでも全身の装甲が罅割れていた。

「シド!!」

ラウラがシドのほうを向く

「オレの事を忘れてんじゃねえ!!」

「くっ」

一夏がラウラに切りかかるが、避けられる。

「シャル！！今のうちにシドを」

今度は鐔競り合いに持っていき、刃を流しながら肌が触れ合わんばかりの距離に入り、腕を掴む。

この距離ならお互い攻撃できないが、動きは多少封じた。

「うん！！」

損傷と大出力の過負荷で崩壊していく装甲と内部機関を調節しながらシドは立ち上がる

シャルロットの姿は目に入っていない
だれも……いないから負けた？

「ふざけるな」

違う。

俺が油断したから負けたんだ

「ふざけるな」

誰かがいるだと？

その差だと…

戦いで必要なのは力と敵も味方も場も総てを利用する抜け目なさ
と生き穢さだけだ。

それ以外なんて自分を縛るだけの邪魔物だ

俺がその良い例だ

自分以外誰も要らない

それ以外は不純物でしかない

己以外の何も頼らないで突き進むから強く在れる

そんなものがあるからお前たちは自分に潰されるし潰された

それ以外の何がある！！？

「ふざけるなふざけるなフザケルナフザケルナフザケルナ」

自分が絶対という圧倒的エゴと自分が持たないものを手に入れると
いう強欲。

それがシドの中で自分を支えていたもの

それを糧に生き続け、戦い続け、奪い続け、奪われ続けていた

自分の中の絶対が罅割れ――

「これで！！」

リヴァイブの左腕のたてが分解し、槍のようなものが現れる。

グレー・スケール

灰色の鱗殻 またの名を盾殺し（シールド・ピアース）と呼ばれ

るパイルバインカー！。

リヴァイブが持つ最大火力の武装だ

――だ

「えっ？」

コアネットワークを介して何かが流れ込んでくる

それは悲鳴のような感情だった

「…でいい」

「なんだかよくわからないけど!!」

これで止めだ!!

灰色の鱗殻を腹につきこみ、杭を叩きこもつとする

「オレハ……デイイ」

——いやだ

軽く叩いてずらし、シャルロットの手に自分の手を伸ばして——
シャルロットの手から鈍い音が鳴る

「うつ…あつ……あああああああああああああ
あつ」

「オレハヒトリデイイ」

——ひとりはいやだ!!

「シャル!!」

一夏はラウラに頭突きを決め、怯んでいる間にシャルロットの方に
飛ぶ。

止めをさせたはずだが、断末魔のような声を聴いた瞬間に頭から吹き
飛んでいた

「何があつた!!?」

「一応大丈夫…だけど…左手は使えそうにないよ」

そう言って見せた左手の指は、片っ端から変な方向を向いていた

「ISは命にかかわらないと絶対防御を発動しないけど……まさかこれでも出ないなんて」

「お前…なんでそんなに冷静なんだよ…」

「なんていうか…現実離れしちゃってて。」

それに——あの声の方が気になっちゃうんだよ」

「声？」

「なんていうか…悲鳴？」

「悲鳴って——」

「俺を邪魔するなああああああああああ——！」

「——」

いきなり一夏が吹き飛ばされる。

瞬間、シドが立っていた場所が爆発する

音速を軽く超える速さで接近したのだ。

「あああああああああああああああああああ」

頭を押さえながら悲鳴を上げる

「俺は強くないといけない
強くないと俺じゃない

力がないと俺じゃない

俺は俺は俺は俺は~~~~~!!!」

明らかに正気を失ったとしか思えない声を上げてシドは消える
もはや影ぐらいしか追えない

「ぐっづああああ」

無意識のうちに構えた場所にシドの拳が激突する。
重さも早さも今までの非じゃない

「俺は一人で戦ってきた。

今までもこれまでもこれからも
だからいらなんだよ

誰も

俺は総てが欲しいんだよ

俺が持つてないもの全部が」

—— いらない そんなものいらない 私が欲しいのは

頭の中に声が響く

なんだ…この声…悲鳴？

受け止めることすら出来ないほどの威力になった拳を弾きながら—
夏は混乱を隠せない

もはや拳打は目視不可能レベルの速さだが、振りが大きい上に目の
前でしか攻撃しないから何とか予測できる。

予測できてもそうする為に極限以上に集中していて視界がスローかつモノクロに染まっている

それでも実質片足だから踏ん張れず、衝撃で腕が痺れ始めている。だがシドはシドで力と速さのせいでネームレスが自壊し始めている。亀裂が広がり、装甲が割れ砕け、内部機関が歪み、シド自身を傷つけて血を飛び散らせる。

動力バイパスが壊れる度に再構築し、破壊され、再構築しつづける。それでも狂ったように攻撃を続ける

「一夏！！こつちも頑張るから、チョットの間耐えて！！」

シャルロットは巧みにラウラを牽制しながらバズーカやグレネードで煙幕を張る。

直接にしる設置にしる見えなければA I Cは使えない。

それに、正直近づきたくないのが本音だ
アレの近くにいと狂いそうになる

「何もかもを奪ってやる奪い続けてやる」

——いらないいらないわたしがほしいのはずっと

「…………いい加減にしろよ」

ようやくタイミングになれた一夏は横から腕を掴む
勢いで爪先が殆ど削れたがかまわない

「欲しいのか要らないのか

はつきりしろ~~~~~~~~!!!!」

叫びながら殴る。

衝撃で崩れた仮面から鬼気を迸らせながら涙を流すシドの顔が露わになる

「おおおおおおあああああああああああ」

大地を蹴り飛ばし、一夏をあおる。

そのせいで一夏の体制が大きく歪む

「お願いだ」

―おねがい

殺やられる！！

放たれた拳は正確に頭を狙う

当たれば微塵にはじけて骨肉の花を散らす事になる

「ぐつつ　　あああ」

全身の負担を無視して
上下左右でも

ましてや後ろでもなく前に飛んで拳の軌道から僅かに逃げる
その僅かが絶対的誤差になり右二の腕を掠めるだけに留まる。
だが、それだけで一夏の二の腕の筋肉が削り取れるが、こちらも通
りざまに雪片で背を切り裂く
二の太刀を決めようとするが地面を爆発させながらの前進で距離を
とられる

「ぐっつ ああああ」

すさまじい熱が右腕を包み込む

血が吹き出るがISが機能を使って止血する

だが製作者の篠野乃束はここまで酷いダメージを乗り手が受けるの
を想定していなかったのか、力を入れると少しにじみ出てくる

「山田先生!!」

今すぐ—— 待ってくれ。千冬姉」

もはや止めなければいけないところに来たと判断した千冬は試合を
強制停止させようとしたが、一夏がそれを止める

今日…ここでこいつらを倒さないと、何も変わらない

見下し続けるラウラはもとより、一人でいいと言い張るシドも、な
んとかしたいと思う

思ってもどうすればいいかわからないからとりあえずぶつかり合う
それから考えればいい

だから……頼む!!!

これは織斑千冬の弟以上に、ただの個人としての頼みに等しかった
たとえ超がつくほどのブラコンでもそれの中にある物を感じられない
ほど、千冬は人間が出来ていないわけじゃない

「――一発だ」

だからこそ千冬は送り出す
一歩成長した弟を

「一発でも体にかすればその時点で試合を終わらせる」

「織斑先生！！」

「私が責任を取る！！」

千冬は叫ぶ
握った両手から血が流れる

「だから…少しだけ待ってくれ」

「――わかりました」

真耶は、千冬の中の我慢と激情の渦を感じ取り、言う事を聞いた

「これで…終わらせる」

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね」

一夏は零落白夜を発動し、機体を金色に発光させる

シドは右腕から自身が溶解しだすほどの青い炎を吐き出し、構えを取る

ただ突っ込んで突き出すだけ
単純極まりないがそれを極限にまで突き詰めた拳は、速さも加わり避ける事だけは出来ない

「お前は邪魔だみんな邪魔だ俺はずっと一人でいい」

「悪いが、そういう奴にほど、関わりたくなる性分なんだな」

右腕はもはや上がらない。

左手も痺れて感覚が鈍い

鎧の破片が刺さったのか、額から血が滲み出る

限界以上の集中を続けていて視界が赤くなる

無理な回避で腰も少し痛めた

だけど、心は折れていない

「目、覚ましてもらうぞ」

全エネルギーを速度とハイパーセンサーの精度に集中

守りが無意味なら守りを捨てる

そうしないと勝てそうにないから

「あ　あああ　あああああああああああああ」

「これで決める！！」

二人は同時に接近する

お互い生身の人間の肉眼では見えないほどの速さで激突する
シドのそれは急激に落ちたが、回避できるほど遅くはない

そして、自分よりも速い

勝てないのかよ…

自分の無力さに歯噛みしたその時！！！！

「しまった！！」

二人のすぐ近くにラウラの砲弾の流れ弾が激突した
それによつて大量の土砂を二人は被る。
だが、この流れ弾が総てを変えた

「えっ…」

それた？

雪片がネームレスのエネルギーを食い尽くす
半テンポ遅れて心臓を狙った拳が大きくそれ、左腕の装甲が消し飛ぶ

「たのむ」

―おねがい

糸が切れたように倒れていくシドは

「一人に」

突き放すように

―一人に

縋る様に

「してくれ」

—しないで

そう言った

「なにが……起こった」

流れ弾が二人の近くに当たり、土砂が二人に当たったのはわかる
だが、何故シドの拳がそれたのかわからない

「軽すぎるからだよ」

シャルロットが構えながら説明する

「軽い……」

「その上速すぎるから」

機体が異常なまでに軽いネームレスは通常のISよりも少ないエネルギーギで運べる。

つまり、他方向からのベクトルに極端に弱いということだ
そこに速さが加われば——

「思いつきりそれるってわけ」

「そうか……」

「シドを倒した織斑一夏に多少の敬意を評してやる」

ラウラは目を瞑り、

「だからもう舐めはしない」

裂帛の気合と共に開き、ワイヤーブレードを一夏目掛けて伸ばす

「くそっ!!」

一夏は雪片で防ぐが、シドとの戦いで体力をほぼ使いきったせいで動きが鈍い

「一夏!!」

「注意が反れたな!!?」

視線を切った瞬間にAICで拘束し、砲弾を叩き込む。

「シャル!!」

「ここまで弱った貴様を潰すのは本意だが、まあ我慢しよう」

ワイヤーを地面に突き刺し、巻き取る勢いで急接近する
迎え撃とうとした瞬間、ブレードを地面から引き離し、その場での
空中旋回で回避する

「終わりだ」

オレの真上のラウラがプラズマ刀を展開して

「くっ!!」

振り下ろされる前にシャルが投げたナイフを防いだ隙を突いて離れる。

「どうする…かなりやばいぞ」

オレはもうフラフラ出しシャルも結構ダメージを受けている
このままじゃジリ貧だ

「どうするって……最初から決まってるじゃん」

「……そうだな」

ラウラをぶん殴る。
それだけだ

「行くぞ」

「うん！」

「来い!!」

二人は左右からラウラを狙う

ラウラは光刃で一夏の攻撃を止め、流れるような動きで回転しながら後ろに回り、レールカノンでシャルロットを砲撃する

PICによる姿勢制御を最小限に留め、後退しながらだ。

シャルロットは一夏を囷に背後に回りながらラウラを撃ちまくるが、AICで止められる

「終わりだ」

砲身を展開するが、下から決るように接近してきた一夏を見て中断し、離れる。

「逃げた？」

あのまま攻撃すればシャルを攻撃できたはずなのにしなかった。そして逃げた瞬間にシャルが動けるようになった
これって…

「まさか！！
シャル」

「うん！」

今の行動で合点が言ったシャルロットは一夏の後ろに行くように飛び、一夏はそれに合わせてシャルロットを隠すように前に動く

「はあっ」

「ふんっ」

二つの刃が激突し、攻防の間でワイヤーブレードを発射し、シャルロットを牽制する。

レールカノンによる遠距離戦、ワイヤーブレードによる中距離戦、

プラズマブレードによる近接戦。

それらを最大効率で行う事こそシュバルツェア・レーゲンの本領とも言える。

近距離でレールカノンを撃つなんて馬鹿以下の真似は絶対しない

どうにかしてどれか一つでも潰せれば…勝機は有る！！

一夏はラウラの近接の間合いから僅に離れる

「んっ」

ラウラは一夏が間合いから離れたのもあり一瞬気を抜くタイミングを合わせるかのように一夏は

雪片を落とす

それに視線が行った瞬間

くらえ。シド直伝喧嘩殺法を！！

「せりゃあっ」

雪片を蹴り飛ばす

「なっ！！」

無茶苦茶な攻撃に驚きながらもラウラはAICで止める。
避ければいいのに使ってしまったあたり大分不意を突かれたようだ

「任せたぞ、シャル」

「任された」

一夏の後ろにいたシャルはワイヤーブレードを避けながらのライフ
ルによる狙撃でレールカノンを正確に撃ち抜く

「ぐあっ」

爆風を受け、AICをといってしまう

一夏は落ちる雪片をつかんで切りかかるが、防がれ、反動ではなれ
られる

「やつぱり…お前、それ使ったら他の奴をまともに見れないだろ」

「くっ…」

凶星を突かれたのか、ラウラは苦い顔をした。

「ようやく気付いたか」

千冬は手の治療を受けながら言う

「何にですか？」

「ボーデヴィツヒのAICは発動も維持も極度の集中が必要になる。
その為、発動中は対象以外に攻撃出来なくなる」

例えるなら精密作業AをしながらBの作業をやるようなものだ。

どうしても無理が出る
無理が出ればミスをする
単純極まりない図式だ。

「一気に決めさせてもらう」

というよりも一気に決めないと倒れる。

『エネルギー重点率80% 零落白夜 発動』

残りエネルギーから見て戦闘可能時間は三十秒弱
それまでに…

「決めるぞ!!
ラウラ!!」

「望むところだ!!」

織斑一夏に戦う力は殆ど残っていない
今現在のものは蠟燭が消える寸前のものと変わらない
恐らく三十秒もすれば終わりだ。

防ぎきれば勝てる
だが

「そんなことで私が教官に届くはずがない!!」

教官なら

教官なら迎え撃つに決まっている!!

「であああああああああ」

「はああああああああ」

上空で二つの刃が激突し、エネルギーがスパークを起こす

「篠野乃流。

風柳」

その瞬間脱力して回りながら刃を流し、柄で後頭部を狙う。

ラウラは頭を前にやって避け、胴を両断しようと振るが、一夏は右腕を体の捻りで無理やり持ち上げる

筋肉がねじれて血管を開き、血が吹き出るが、かまわない。

そのまま光刃を跳ね上げ、反動で雪片を振り上げる

刃がラウラめかけて向かい

「ッッ！！」

ラウラにあたる直前に、光が消える

こんなところで、エネルギー切れかよ

一夏は歯噛みするが、現実是非常である

「天は私に味方したようだな」

勝利の笑みを浮かべて思いつき叩き落す。

維持するのが精一杯の状態では耐える事は当然出来ず、地上に落下する。

「止めだ！　があっ！！」

いつの間にか接近していたシャルロットがタックルでラウラを吹っ飛ばす。

「まだ終わってないよ！！」

シャルロットは超加速して間合いを詰めながらライフルを撃ちまくる

イグニッション・ブースト
「瞬時加速！！？データにはなかったはず」

「今初めて使ったからねえ」

恐るべし学習速度だ

「この戦いで覚えたというのか！！？」

「お母さんには、物覚えのよさでほめられてたんだ、よっ！！」

ライフルを放り投げ、灰色の鱗殻で貫こうとする

「止まれ！！」

ラウラはとつさにAICを発動しようとするが、背中を撃たれる

「なっ！！」

撃たれた方を向くと、投げられたライフルを回収氏が一夏が片手で構えていた。

「きつつさまあああああああああああああー!!」

「ぐあっ」

ワイヤーブレードを発射して一夏を吹っ飛ばす。

「どこを見てるの?」

ラウラの懷にシャルロットはもぐりこむ

「くっ」

だが目の前での緊急事態に対して耐性のあるラウラはワイヤーブレードを地面に打ち込んでその勢い左にで離れようとする

だめっ!!

今ここで離れられたら勝てない!!

一夏は死に体。

こっちも大分体力が削れてる

ここで決めないと、負ける

「くそっ」

どうにかしないと

けどライフルはずっと向こう。

あるのは雪片だけ

それに今の状態じゃ間に合わない

出来ること。

何か出来ることは――

「ッ！！」

一夏は、前にシャルロット相手にやった事を思い出す

「とおおけええええええええええつ!!」

思いつきり振りかぶり、雪片を投擲する
まっすぐラウラの側頭部に飛んでいくが

「むだだ」

ワイヤーの微妙な操作で避けられる

「けど、おかげで近づけた」

ラウラの咄嗟の動きはあくまでも視線の先の相手が起こした動作に
対してではない
なぜなら、不意打ちはあくまでネームレス本体からしかされていな
いからだ

「これで――」

灰色の鱗殻を腹に向け

「やい、うい」

杭を打ち出し、ラウラの胸を貫かんばかりの一撃を叩き込む

絶対防御が発動し、エネルギーを根こそぎ失い、壁まで吹き飛ぶ

「まだまだああつ」

再び瞬時加速を使って間合いを詰め、連射する

負ける…のか？

こんなところで

嫌だ！！

負けたくない

私が生まれた大元の場所は母親の腹の中ではなく、試験管の中だった。

戦う為に生み出され、育てられてきた。

そこに不満も苦痛もなかったし、それ以前にそれが当然だった

私は優秀だった。少なくとも、世間一般がそう言う程度には能力があった

だがそれは——ISの出現によって無残に消え去った

IS適合性向上の為にナノマシン移植。

理論上安全なものだったが、私の体は適応できずに成績を落とし…

…出来損ないの烙印を押された

そんな時に、あの人に出会った

彼女は優秀な教官だった。

彼女のお陰で今の私が存在する。

強く、気高い彼女に憧れた

だから——教官にあんな顔を……優しい顔をさせるお前を認めない。

だから、力が欲しい

圧倒的力が。

総てを打ち砕ける力が！！

―力が欲しいか？

ラウラの意識に声が響く

それはシドから聞こえてきた悲鳴と違い、重く、禍々しい声だった

誰だ？

―力が欲しいか？

欲しい。比類なき最強の力が

―力が欲しいなら

教官のような最強の力を
シドのような凶悪な力を

―くれてやる

「うあああああああああ」

ラウラが悲鳴を上げたのと同時にシュヴァルツェア・レーゲンから
紫電が迸り、シャルロットを弾き飛ばす

さらに、液化化しだしたシュヴァルツェア・レーゲンがラウラを飲み込み、変形していく

「なっ、何！！？」

シャルロットは目の前の光景に驚く。

ISは形態移行しない限り姿が変わらない。
今の状況は不可解すぎた

ラウラを包んだ、液状化した金属は姿を変えていく。

「警戒態勢。レベルD」

「はい。でも、アレはいつたいなんなんでしょうか？」

真耶の問いに千冬は読破しながら

あれが私の考えどおりなら……

「少し。いや、かなり厄介な事になるな」

アリーナのシールドのレベルが上がり、観客席の防護シャッターが閉じられていく中、一人の女性は喜悦の笑みを浮かべながらアリーナの入り口に向かっている

その女性は新雪のような白髪と虹色の瞳を持ち、人工物のような美しさを持っていた。

「全く。」

女神の産物の次は模造品の天使とは、この学校は闘争の渦か何かなのかな？

その上」

任務対象の観察に来たのはいいいけど、まさかシドを倒すとはね。

まあ発作中で技術性皆無なところを不意打ちを受けたのもあるけど、負けは負けだから危険度を極小から小に上げるくらいはしとくか。

「ああなったらしばらくは使い物にはならないし、劉鳴かミリアを監視につけるべきか……」

最近どつかの馬鹿組織のおかげでうちも繁盛してるから休みをあげたいんだけど……

「代わりに給料上げるか…特典つけるか…」

この件は事見ながら考えよ

ラウラを完全に飲み込み、変化したシュヴァルツェア・レーゲンはその原形を留めていなかった

その形は第二世代型うちがねIS打鉄に近いが細部が異なり、人間の部分是不恰好なマネキンのようになり、顔にあたる部分の輪郭は、どこかで見たことがあった。

否！！

それは紛れもなく一人の女性の面影を宿していた

右手に持った武器もまた、彼女が嘗て使っていた武器と同じ形をしていた

「雪片…千冬姉と同じじゃないか……」

それに…見た目もまるで…

目の前のものが何か理解した瞬間、一夏の頭は沸騰した

「オレがやる」

言葉から凄まじいまでの怒気がにじみ出ている。
絶対にアレを許さない。

許してなるものかという怒りが伝わってくる。

マネキンもどきは構えた一夏に接近し、雪片式型目掛けて斜め目上から振り下ろし、握りが甘くなった所を振り上げて弾き飛ばす。
そこに首を切断するように振るわれるが、一夏は左腕でガードする。
だがそれが限界で、エネルギーが完全になくなり、白式が消える。

あの剣技…オレが千冬姉に最初に習った真剣の技だ。
それを……

「勝手に使ってんじゃねえ!!」

殴りかかろうとするが、シャルロットが後ろから羽交い絞めにする

「落ち着いて一夏!!」

「放せ!!この野郎は!!千冬姉の——」

もはやわけのわからないうめき声のようになっている
それをマネキンもどきはただ見ている
どうやら無人機と同じく攻撃のための条件があるようだ

「いい加減に…してよ!!」

暴れる一夏を自分の方に向けて、軽くはたく

「いったいどうしたんだよ」

「あの技は、千冬姉のものだ。

それをあの野郎は変なものまで混ぜて……」

頭が少し冷めただけで全く話を聴いていない

「だけど、白式のない君には何も出来ない
それに——」

マネキンもどきを教師のISが囲む

「状況は君が動かなくても変わる」

「違う。

オレがやらなくちゃいけないからやるんじゃない……やるって決め
たからやるんだよ!!」

たとえ素手でもやらなくちゃいけない。

千冬姉を汚したこいつを許さない

「わかった。ちょっとだけ手を貸してあげる」

言っても聞かない事を察したシャルロットは腰からコードを取り出
し、白式の待機携帯のガントレットに繋げる

「リヴァイプのエネルギーを全部上げる。
ちよっとただけだけど、いい？」

エネルギーが総て移され、リヴァイブが消える

「かまわない。

それだけあれば十分だ」

白式を限定展開。

左腕と雪片しかでてこないが、十分だ

ラウラのまわりにいた先生達が離れていく。

多分、千冬姉が何とかしてくれたんだろう。

本当に……迷惑かけてばかりだな

「右腕：持ち上げてくれないか？

自力じゃ上げれそうにない」

シャルロットはゆっくりと構える事が出来るあたりまで持っていく

「ぐっ……ぎっ　ぎっ」

尋常じゃないくらい痛いが歯を食いしばって耐える

「約束して。

負けないって」

「ああ。

オレを信じろ」

一夏はマネキンもどきの前に立ち、零落白夜を発動し、構える

「行くぞ偽者!!」

マネキンもどきは一夏に切りかかる。

本来なら一夏は反撃も出来ずに両断されたはずだ。

だが、変に力任せで型が崩れていて、早さも鋭さも鳴くたやすくは
じかれ、目根から腹にかけて切り裂かれる

そして、エネルギーを完全になくして液体化して説け崩れていくマ
ネキンもどきから投げ出されたラウラを、一夏は優しく抱きかかえた
弱っている彼女を見ると、殴る気も失せた

着火9 激突 暴走×2（後書き）

シドの異変は三巻あたりで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2927u/>

インフィニット・ストラトス 黒炎の騎士

2011年11月21日16時30分発行